
no alignment **僕の属性を教えて**

るの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

no alignment 僕の属性を教えてください

【Nコード】

N9136S

【作者名】

ろの

【あらすじ】

僕は 落ちこぼれ である。

それも何万年に一度生まれるかどうかもわからないようなとてつもない 落ちこぼれ である。

これはそんな16歳の僕のお話…

この世界では属性がすべて。すべてに属性がある。

火や水や風なんてオーソドックスなものから

ツンデレやら、バカ、なんてふざけたものもある。

僕が8歳の時最初に言い渡された属性から
僕の人生はおかしくなっただんだ…

第01話 「始まりの前のお話」

僕は 落ちこぼれ である。

それも何万年に一度生まれるかどうかもわからないような

とてつもない 落ちこぼれ である。

これはそんな16歳の僕のお話…

この世界では属性がすべて。すべてに属性がある。

火や水や風なんてオーソドックスなものから
ツンデレやら、バカなんてふざけたものもある。

その属性は8の倍数の年に言い渡され、
40の時の儀式を最後に5つの属性が確定される。

しかし特別なのが8歳の儀式。

この儀式だけはかならず基本的な属性を言い渡される…

その属性がこの魔法世界、イリュシオンで生きるための力になる…

はずなんだけど...

話は8歳の時までさかのぼる...

第01話 「始まりの前のお話」 (後書き)

初めての投稿。

ちよこちよこやっていくので生暖かく見守ってください…

第02話 「8歳の時のお話」

今日は僕レントの8歳の誕生日。

第1属性が決まる大事な日。

ドキドキして眠れなかったせいで
ものすごく眠い中お母さんの焼き立てのパンをかじってる…

「レントはどんな属性かしらね？」

「お母さん火属性だしドジだから

何かやらかした時のために水属性がいいな。」

「ドジって言わないでよー（泣）」

他愛もない会話だけとても落ち着いた。

昨日までの緊張が嘘のようですと肩の力が抜けた。

「いってくるね。」

「いってらっしゃい！」

とびつきりおいしいご飯作って待ってるからね！

ご飯に期待を膨らませて玄関を開けた。

「おーいー！レントーー！」

「あつ、おはよう、ラーク。
一緒に行つてくれるんだ？」

「おうよっ!」

この人は幼馴染のラーク。

仲良くしてもらってるけど…

調子のいいやつでとっても振り回されてる。

でもイケメンだからチャホヤされてる。

同じ年なんだけど儀式は終わってて、属性は土って言われたみたい。

本人は「なんだよ!こんな地味な属性ってないぜ!」

って言ってた。確かに似合わないかな。

「じゃあさっそく神殿に行くぞっ!」

「うんっ!いこう!」

とっても気持ちいい快晴の中をとてとて走って神殿に向かった。

「お前はどんな属性だと思うんだ?」

「うーん、わかんないけど水属性とかがいいな!って。」

「なんかお前ジメジメしてそうだもんな!。」

「ひどいよー(泣)」

いろいろと話しながらラークが近道だという道走る。

その時聞いた話なんだけど今年は基礎属性のなかでも

上位属性に入る光、闇が出たらしい。
その上レーザーなんてレアなものも出たらしい。
今年は波乱なんだって。

石畳の細道を抜け大きな階段を上ると歴史を感じさせる
厳かな建物の姿が目の前に。ついた。神殿だ。

「遅いわよー！あんたたちー！」

げっ、アリスだ。

この子も幼馴染でアリスって女の子。
かわいいのは名前だけで、とってもうるさ…活発な子。
でもすぐ叩くからちよつと苦手。この子も儀式終わってて属性は火。
やる前からそんな気はしてたんだ、僕もラークも。

「早くしなさいよ！神父さんもう待ってるんだから！」

「そりやまずいな、早く入るぞっ！」

急いで中に入ると、神父さんが泉の傍で立って待っていてくれた。
二人は神父さんの傍でこちらを見ている。

「早速ですが祭壇へ。」

「はっはい。」

「すぐ終わりますので力を抜いてください…」

あたふたしている僕は神父さんの言つとおり
大きな泉の前の祭壇の上で片膝を立てる。

… 始まつたみたいだ。

神父さんが何やら唱えると祭壇を温かい光が包む。

なぜかとっても安らぐ… 心地よい光…

それとともに泉から声が聞こえた。

おそらくこの声が僕の属性を告げているのだろう…

でも古い言葉なのかよくわからなかった。

光が収縮する…

終わったのかと神父さんの方を見ると

神父さんが慌てふためいている…

どうしたんだろう？

「君は… レント君、今日で8歳、間違い… ないね？」

ん？ 今更何を聞いているんだろう。

「はっ、はい。」

「落ち着いて聞いてくださいね…」

なっ、なんだろう…

「あなたの基礎属性は…」

「属性は…?」

「あっ…ありません…」

「?」

第02話 「8歳の時のお話。」 (後書き)

5 / 6

なんかバグって消えてしまっ
て焦りましたが
バックアップ取ってあつてよ
かった…

第03話 「続・8歳の時のお話。」

へ？

「正確に言うと、告げられた属性が基礎属性でないということでした…」

8歳ながらこの話が意味不明なのはしっかりとわかる。

「えっ、でも僕初めての儀式なんですけど…」

「だから驚いているのですよ…」

「こんなことは数万年に一度あるかどうか…」

しばらく沈黙が続いたあと神父さんは口を開いた…

「私は祭祀長と話してきますので」

「みなさんはお家に帰っててください。」

「おじいちゃん?!?」

おじいちゃんはこの街のお祭りや儀式とかをいろいろと仕切ってる偉い人なんだ。

名をグラオヴェン…この国で唯一三属性を操れる魔法使い…

生まれ持った属性に加えて二属性というのは恐ろしいこと…
自分が持っていない属性を操るといふのは
途方もない量の呪文スベルを覚えなきゃいけない。

自分が持つ属性は潜在的に操ることができただけどそれに比べて
持っていない属性はあまりに労力がかかるから誰もしない。
そんなことを独学でやり遂げた努力の天才なんだ。

こう聞くと怖そうないメージがあるかもだけど
とっても優しいおじいちゃんだよ。

「これはとんでもないことなんです。

結果は追って連絡すると親御さんにお伝えください。」

そう聞いた僕達はとりあえず自分の家に帰るため神殿を出た。

神殿を出るといい匂いがする。

ちよつどお昼ご飯の時間みたいだ。

「いやー…なんかすごいことになったなー…」

「いつつもふらふらしてるからよ！

しゃきつとしてなかったからこんなことになったの！」

アリスのチョップが僕の脳天を直撃した。

「わぶつっ！…うー…そんなあ…」

「とりあえず俺はこつちだから！
なにかわかったら教えるよなっ！
じゃっ！」

そういうとラークは猛スピードで去って行った。

「あつ私もこつちだからっ！
私にもちゃんと教えに来なさいよ！
じゃあねっ！」

二人と別れたあと、家に着くとなぜかおじいちゃんがいた。

「おじいちゃん！なんでお家にいるの?!」

「なんでも何も孫の第1属性が決まるというのに
かけつけんじじいはおらんじゃろう！
そんなことより早よう座れ座れ！
座って発表するのじゃ！ほれほれ！」

「うーん…それがね…」

バタンツ!!!!!!!!!!

あわただしい音とともに神父さんが入ってきた。

「祭祀長様！こんなところにおられましたか！」

「なんじゃなんじゃ騒々しい…」

今回は抜け出したりしとらんぞ？

ちゃんと正式に休暇を取ったじゃろっ…」

「いついえ、今日はそこにいるレント君の件でして…」

そそくさとおじいちゃんを外へ連れ出すと何やら話している。

「なんじゃ、レントならさっき儀式を済ませたろっ…」

「まだ聞いてないんですか…レント君基礎属性がなかったんです…」

「なっ…なんじゃとおおおお！ガタガタガツシャアアアン」

「おっ落ち着いてください祭祀長！」

「落ち着いていられるか馬鹿者！

属性がないなどありえん！ちゃんと儀式は行ったのか！」

「はい！間違いなく！しっ…しかし属性がないわけではなく…」

しばらくすると二人が戻ってきた。

「レント…落ち着いて聞くのじゃ…」

おぬしの属性はな…」

のろま…じゃ…」

第03話 「続・8歳の時のお話。」（後書き）

レント、ラーク、アリスの主要メンバーに加えおじいちゃんが出てきました。結構この先も出てくるおじいちゃんに注目です。

第04話 「始まりのお話。」

僕は今日16歳だ。

のろまだと言い渡され、基礎属性を持たない 落ちこぼれ だと、異端者だと後ろ指を指され、男の子なら経験するであろう はじめての狩りおっかいも何も経験せず8年を過ごした。

普通に勉強して、家事やらその他もろもろを手伝っていたせいで 同年代の男の中では群を抜いて料理上手になってしまった。嬉しいんだか悲しいんだか複雑だよ…

外に出てもいいことがないのでインドア精神に拍車がかかる一方。将来は主夫かな、とつてもいいお嬢さんになれる気がする(泣)

親しい人たちも気味悪がつて離れて行ってしまった。

でもラークとアリスは今も変わらず仲良くしてくれてる。

ありがたい話だよ…

ラークはイケメンに磨きがかかって人気者の上に、

土属性じゃ気に食わないという理由だけで、

雷属性を勉強して操れるまでに…(バカに見えるけど頭いいんだよ

ね…)

アリスは魔法剣士で若くして将来有望な魔法剣士に…
マキア・エクス

相棒のツヴァイハンダーに炎を纏わせ今日も戦ってる。

ちなみにラークとアリスの第2属性は

ラークは身軽、アリスは怪力だったんだって。

意外かも知れないけど属性つてのは割と幅広くて…

例えば物体の色や形、人の能力、素性、社会的関係とか…（引用：ういき であ）

しょーもないのもたくさん当たるんだ。

重要なのは第1属性だけだったりして、

あんまり第2以降には期待してないんだよね、みんな。

ちなみに今年最高にしょーもない属性は指パッチン。

だから比較的二人とも当たり引いたほうなんだよ？

ってことでまあ今日は誕生日であり覚醒の儀式の日なんだけど…

お母さんは「お昼までに帰ってきなさいねー？」

って普通にしてるしラクモアリスも用事みたいだから

一人で行ってぱつと済ませるって感じなんだ。

とりあえず準備もできたし、あの日と同じように

焼き立てのパンをかじりながら

「いつてきまーす」

「いつてらっしゃい（ニパッ

基礎属性引けるといいわね！

望みは薄いけど一応祈っとくわね！」

望みが薄いは余計だよお母さん（泣）

あの日と同じ快晴、鳥の声。

木漏れ日に包まれた石畳をてくてく歩く。

8年前通った近道は今は属性「大料理人」を持った人が
お店を出したせいで通れなくなってしまった。
でも料理は確かにおいしかった。うん。

大通りに出て坂道を上がって、昔より小さく感じる階段を上ると
8年経っても変わらない神殿があった。

中へ入るとあの神父さんが、と思ったら今日は女の神父さんだ。珍
しい。

「レントさんですね！お誕生日おめでとーございまーっす！」

「あっ…どうも…珍しいですね、女の神父さんなんて。」

「そうですね…そうかもしれません…」

今日は神父さん風邪なんですよー…

まあ細かいことは気にせずに！

お急ぎなのでしょう？早く始めましょっつ！」

なぜか不安に駆られた。（一応普通の反応だよな？）

前のように祭壇に上って

片膝を立てて座り目をつぶると、

女神父さんは何やらぎこちなく唱え始めた。

それと同時に光があふれてきた。

あの時と同じ温かい光だ、心地いい。

春の陽だまりの中で、そよ風が優しく頬を打つような感覚。

僕はその感覚に懐かしさを覚えた。

そして、泉から聞こえた声、僕の属性が告げられたようだ。

光が収まったと同時に女神父さんはニコニコこっちを見ている。

「いやーレントさん！よかったね！超レアだよ！レア！」

「えっ？第2属性って大体大したことないんじゃない？」

「大体は、ね！でもレント君とびつきり運がいい！」

聞いて驚かないでね！レント君の第2属性は〜…」

僕が運がいい？何かの冗談だよね…

運が普通以上に良かったら基礎属性がないなんてことがありえるはずないんだから。

そう、この時、僕は本気でそう思っていた。

でもきつとあの時のありえない間違いを、

この世界での理に反したできごとを、

神様もきつと見ていたのかもしれない。

ここから僕の人生は大きく変わる。

「君の第2属性は 絶対記憶 だっ！」

第04話 「始まりのお話」 (後書き)

やっと始まります、前置き長くなりましたね…

初めてなので文章がおかしいなどあると思うので

気付いたら教えてくれるととてもうれしいです(、；；；)

あとお気に入り登録嬉しいです。がんばります！

絶対記憶のすごさに関しては今後明らかになります。

5 / 3 誤字修正… ミスなくかけるようになりたい…(、；；

、)

第05話 「人生悪い事ばかりじゃないっていうお話。」

「君の第2属性は 絶対記憶 だっ！」

絶対記憶

僕はその属性に聞き覚えがあった。

今はもういない父と、同じ属性だ。

名はテロス。

父はこの属性を駆使してあらゆる魔導書を読み

あらゆる属性の魔法を操った。

そして読み、蓄えた魔導書の数から、こっ呼ばれた。

そんな父も僕が生まれる前に、その時世界中と対立していた魔道帝
国カサルティリオとの
世界魔導大戦の最中、カサルティリオの王、オルデンと刺し違えて
戦死した。

それから王を失ったカサルティリオは衰退し、滅び、終戦を迎えた。
あれから16年、父は英雄だとか救世主だと呼ばれ、今では教科書
に載ってる偉人だ。

そんな父と同じ属性…

「いやあ！おめでとう！すごいね！
私初めてみたよ英雄と同じ属性なんて！すごい瞬間に立ち会えた
わっ！

せっかくだから家に帰る前に国立図書館に寄って帰るといいんじ
やない？

封印された書物の展示会もやってるし！まあ見れるのは表紙だけ
だけどね（汗）」

「そういえばやってましたね…
うーん…じゃあ寄ってみようかな…？
とりあえず今日はありがとうございました。えっと…」

「あっ私ね！ポルフィ！よろしく！」

「あっ、ポルフィさん…ありがとうございます。じゃあさっそく行ってみることにします。」

「うん！どいたまだよ！

気を付けてね！また明日！」

僕は神殿を出て立ち止まってみる。

でも、実感がない。

僕がそんなすごい属性を持つてるなんてとても思えなかった。

とりあえず国立図書館に行くことにした。

階段を下りて商店街の方へ歩く。

商店街を抜けた先がアフトラトリア国立大図書館だ。

ここは大陸一番の蔵書で、数億冊の書物が保管されている…

その半分以上がほかの小さな図書館などでは置いておけないような危険な一級禁忌魔導書。

管理が厳重なため、大陸中の危険な魔導書のほとんどはここに送られてくる。

そんな魔導書がごろごろしているため盗みにくるものも多く、そのたび警備やトラップが厳重になるため、今では要塞化してしまった図書館だ。

ちなみにここにはよく来てたんだ。魔法がほとんどできない僕の唯一の趣味だよ（泣）

その図書館へ行くまでの商店街も結構すごい。

ここへくれば、ないものはないというくらいだ。

ちよつと路地へ入ればアヤシイものも

たくさん売っている…（怖いお兄さんもたくさんいる…）

お昼までには帰らないと…今日のごはん何だろ…

などと考えながら商店街をてくてく歩いていると、

武器屋の前がなんだか騒がしい。

「何でこの砥石がこんなにするのよ！

この前来たときは100リコぐらい安かったじゃない！！」

「最近商人が通る道にゴブリンを従えた盗賊団が出るらしくて

値段をあげないとやってられないと言われまして…

こちらもこれ以上は値段は下げられないんです…」

「ふん！もうこんな店来てやらないわっ！」

大剣を背負い真っ赤な髪を靡なびかせて歩いてくる。

大声の主はやっぱりアリスだった。

「アリス〜どうしたの？」

「おお！のろま！ちよつと聞いてよ！この人さあ…」

「大声だから全部聞こえてたって…あとのろまはひどいよー（泣）」

「聞いてたんなら何かいい案考えなさいよ！私が困ってるんだから！」

「そんなぁ…（泣）」

相変わらず自分中心って感じだなぁ（泣）

「まあいいわゝほかの武器屋に行くし。

あつ、そういえば今日儀式だったわよね？

属性はなんだったのよ？」

「うーん、それがさぁ…」

「あーやつぱいいいや、どうせ大したのじゃなかったんだろうし。

私急いでるから！じゃあね！のろま！」

「あつ、うんゝ。またね！あとのろまはひどいよゝ（泣）」

一通り見て回ったあと、商店街を抜けて大図書館へ進んだ。

ごつい衛兵さんが守る門を通って、でっかい扉を開けると

壁一面の本…本…本…がお出迎え。

首が痛くなるほど高いところまで全部本棚だ。

地上にある本は一応すべて貸出可能な本だ。

まあカウンターの脇の扉から入ることができる

イベントブースには珍しい本とか貴重な展示品とか…

時期によっていろいろ公開してる。女神父さんの言ってた本の展示は多分そこだ。

「おっ！レント君！いらっしやーいっ。」

予約してた本、もう返却されてるよっ！」

「あっ、いえ今日はその本じゃなくて…」

えっとー…基本的な魔導書…ありますかね？」

「あー、持っていない属性でも使えるような日常魔法の本かな？でもそれならもう読んだんじゃないかなかったっけ？」

「うーんとそういうのじゃなくて…」

属性持ちが読む呪文書スペルブックみたいな…」

なんか呪文がずらずら書いてるあれです。」

「えっ？もしかして基礎属性持ってないから

基礎属性の魔法を勉強しようっていうんじゃない？…」

「そっ、そのまさかだったり（汗）」

「おおっそうなのかー！レント君努力家だね」（号泣）

よし！お姉さんに任せなさい！どの属性がいいんだい？！」

「ひっ…一通り全部…」

「え…わっ、わかった。ちょっと待ってね！

今手配するから！（あらあらレント君自暴自棄かしら…）」

今すごい声出たよね、気のせいじゃないよね（泣）

本当にちよっと待つとお姉さんがカウンターからどっさり本を取り出した。

「うんしょつと！」

この本達はもう何年も貸出要求が全く来てない本なのよ！
だから好きなだけ借りてていいわっ！

ざつと説明するわね！

えーつと火・水・土・風・雷・氷・光・闇・無、

おまけに簡単な召喚呪文の本まで付けたよ！（ドヤア）
サモンスペル

「うわぁ！ありがとつございます！さつそく読んでみますね！」

「うん！がんばれ！お姉さん応援してるからね！」

どっさりな本を抱えてさつそく家に帰った。

にしても昔から気になってるんだけどカウンターのどこから本出してるんだろつ…

今度来た時に聞いてみることにしよう…

家に着いた時にはもうごはんはできていた。

「あら！おかえりなさい！」

どこか寄り道してたの〜？

…ってその様子じゃまた図書館かしら？

「うっ、うん！よいしょつ…」

重かった…今日のごはんは？」

「今日はビーフシチューと私の焼き立てのパンです！」

「昨日もビーフシチューだったような…」

「きつ、キニシナイキニシナイ！オホホホー！」

昼飯をたらふく食べ、借りた本を部屋に運び、
火の呪文書スベルブックだけ持って庭に出た。

本を開いてとりあえず全部読んで見た。

確かに全部覚えられた…

でも写真のように思い出せるだけで

潜在的に使えるようになるには思い出す練習とか
効率良く覚えることとか多少の努力は必要そう…

まあとりあえずこの火の球ファイアー・ボールでも…

どうせ大した威力も出ないだろうし木の棒でも立てて当てる練習で
もしようかな。

なんかラークが言うには口で唱える祝詞みたいなものを唱えながら
長つたらしいルーン文字で書かれた呪文スベルをを心の中でなぞるとか言
つてたかな…

こんなややっこしいことをラークはやってるんだよね…

まあ属性持つてるからある程度コツはわかっているんだろうけど（泣）

よし唱えるぞっ…

「火の精霊イグニスよ…

その際限無き力を、炎を

巨大な槍に乗せて目標を討て！

フランマ・ランケア
「炎の槍！」

その瞬間僕の目の前に一筋の炎の柱が！

って…

あれっ？

第05話 「人生悪い事ばかりじゃないっていうお話。」 (後書き)

やっとファンタジーらしくなってきましたね！

なかなか長ったらしくなってしまった気がしますが…

まあ気にしないで置きましょう(笑)

第06話 「雨が降る夜のお話」 (前書き)

注意

少しだけ心の準備をしてください。(別にグロとかではありません。)

)

第06話 「雨が降る夜のお話」

炎の柱は幸い小さかった。

降ってきた槍も柱が消えると同時に消えて無くなった。

刺してた棒はもちろん消し炭に…

被害は庭が焦げただけで特に何もなかった…

不幸中の幸い、ってやつだね…

にしても、まさか違うところ読んでしまうとは思わなかった。

読めたとしてもこんななかなか強そーな魔法が

こんなに簡単に出てしまっていたいいのか。

いいはずないよね、うん。

便利だけどね、便利なんだけどね。

ものっすごい危ないよねこれって。

うん、気をつけよう、今度から。

しかしこんな街中で戦闘用の魔法を軽々しく使うなんて

あってはならないことで、見つかったらものっすごくマズイ。

まあ予想としては

家の近所の人は、

「またあそこの奥さんがやらかしたのかしら。」

ちよつと離れたところでは、
「花火でもやってるのかな。」

外に出てた人も、

「昼間に流れ星見れるなんてラッキー！」

ぐらいで済むよね、多分。（一人ラークが混じってる気がする。）

ここで問題なのは…

そう、お母さん…

そつえば紹介してなかったけど
名前はアルカ。

ドジばかりだけど昔はアフトクラトリア国立魔法大学を首席で卒業して

とつても頭のいい人…で通つてただけど、まあ見る影はないよね…
あとは…怒ると怖い…かな（滝汗）

その怒ると怖いお母さんにはごまかしが効かない状況…
さあどうしたものか…

「れっ、レント！あなた…！」

げっ…いきなりバレた…

マズい…怒られる…

「レント！あなた魔法が使えてるじゃない！
どうしたのよ！すごいじゃない！！！」

「あれ？怒らないの？」

「へ？何で怒るの？
すごいことじゃない！」

大丈夫かなお母さん…

「そつ、そつだよね！
怒ることじゃないよね！」

「そつよ！すごいことよ！
そういえば新しい属性聞いてなかったわね！
今の光は火属性の魔法…何か降ってきたし…
焦げた跡の直径から考えて…

フランマ・ランケア
炎の槍とかかしら…

ということは火属性が当たったのね！
それにこんな中級魔法をいきなり！すごいじゃない！」

うん、バカではなかった。

「さっ、さすがお母さん…

でも僕火属性は当たってないんだ…」

「あららっ？じゃあなぜ魔法が使えるの？」

「僕の第2属性は 絶対記憶 だったんだ。」

「へっ…へー！すごいわね！びっくりだわっ！」

「うん、お父さんと同じ属性で、こんな魔法使えるなんて
これっぽっちも思ってたから…
もしこんなろまの僕でもこの力で役に立てるのかなあって思つと
なんだかとっても嬉し…」

「甘ったれないで。」

「えっ…」

「いっいや！魔法の世界も甘くないぞー！ってことよ！
ほら魔法を使って戦うってのは危険が付き物でしょう？」

「そっ、そうだよね！いろいろあるもんね！」

「そっそっ！」

「……」

「……」

「僕、部屋に戻ってるね！」

「そっ、そう！うん！わかった！」

部屋に戻った僕は自分の家だとは思えないような
居心地の悪さと違和感に襲われた。

なぜかはわからない。

でもさっきのお母さんは怖いとは違う何か…

そっ、なんだか悲しく見えた。

部屋においてあった魔導書を手にとると必死で読み漁った。
そっでもしないと落ち着かなかったからだ。

しかし簡単に読み終わってしまう。だから何度も読んだ。

何度も、何度も。

気付けばたった数時間で全て10回以上ずつ読んでしまった。嫌というほど覚えた。染みつくほどに。

その日の晩の食卓は

必要最低限の会話だけの食事。

本当ならもらえるであろうプレゼントも言い出せるはずもない。あまり居心地の悪さに戻しそうになってしまった。

食事を済ませ部屋に戻ると一日の疲れですぐにベッドに入った。さっさと寝ようと。眠って朝起きたら普通に話せるだろうと。

その夜の事は鮮明に覚えている。

昼間の快晴からは考えられないような大雨が、

僕の部屋の窓に叩き割らんばかりの勢いで打ち付けていたことを。

何度となく響く雷鳴が怒号のように聞こえたことを。

間違いなくあの日は

僕の人生で最低の誕生日。

第06話 「雨が降る夜のお話。」 (後書き)

シリアス回苦手な方はホント申し訳ない…

あんまりシリアス入れないつもりだったんですが少しだけorz

あと感想・お気に入り登録本当にありがとうございます！

とつてもうれいす！力になります！(´；；；；)

そいえば感想つて一言のとこだけでもできるんですね…

知らなかつたですー…(´、；)

ちなみに感想は小説家になろう！ユーザー以外の方にも

書きこんでいただけるようにしてありますので

気軽に書いてくれるとうれいす！(*´、*´)

では！あとがき長くて失礼いたしましたノシ

第07話 「大大大ピンチなお話。」

寝覚めは最悪だった。

激しい雨と雷の音でまともに眠れなかったからだ。

起きてしまったものの、どんな顔をして、

どんなことを話したらいいのかもわからぬまま、

眠気眼で階段を降りると朝ごはんを作る後ろ姿があった。

「おはよう、お母さん。」

「あら！おはようレント！

今日のごはんはサンドウィッチよ〜っ（ニパッ）」

多分その時の僕の間抜け面ったらなかったと思う。

昨日のことが嘘のようないつものお母さんだった。

「そついえば今日図書館から手紙来てたわよ〜？」

「うん？なんだろ？」

なんだか拍子抜けしてしまったが、

サンドウィッチをモグモグ食べながら手紙を読んでみる。

『レント君！君が借りてる本の一つに貸出要求が来てるのよ！

ごめん！返却してくれないかな！ほら！召喚呪文のやつ！
サモンスベル

早ければ早いほどいいから、ちゃちゃっと思ってきちゃって！

あつ、代わりに違う本用意してあるから心配しないでいいわよ!』

これカウンターの姉さんからだね…

んー…そういえば全部読んじゃったしなあ…

今日は暇だしまとめてパパッと返しに行こうかな。

「ごちそうさま、ちょっと図書館に本返してくるね。」

「あら、気をつけてね?お昼までには帰ってくるわよね?」

「うん、多分。」

部屋に積んである本を持って降りると

袋があるから使っているよ〜

と一つで全部入っちゃうようなでっかい紙袋をくれた。

本をテキパキ全部詰めて図書館へ向かった。

今日はどんよりしているけど雨は止んでいる。

湿度の高い空気がとても重く感じる。

商店街も心なしか少し賑やかさに欠けている気がする。

いつものように衛兵さんのいる門を抜けて

湿気で軋む大きな扉をゆっくりと開けると
いつものお姉さんがカウンターで本を読んでいる。

「おっ！レント君、いらっしやい！」

「こんにちわっ。」

手紙読みました、本、全部読み終わっただんで
まとめて返却しにきました〜…」

「うっそだあ！昨日借りたばかりじゃん！

意味わかんなくて諦めたんでしょーもうっ！

まあいいさいいさ！持ってきてくれてありがとうね！
助かったよ！お茶でも飲んでいくかい？」

「はっ、はあ…（ホントに読んだのに…）」

お茶はいいです〜というか勤務中に

お茶飲んでちゃダメだと思っただけど…（汗）

それに図書館だし飲食禁止じゃ…」

「細かいことはいいのよ！私が許可するっ！（ドヤア

まあまた今度お茶のみに来てね〜？」

本とか濡れたら大変だよなあとか思いつつ図書館を後にした。

するとなんだか商店街の方が騒がしい。

胸騒ぎがしたので走って戻ってみると
商店街にいた人たちが街の上のほう、さっきいた図書館を通り過ぎて
どんだん上の方に登って行っている…

「城下に巨人族が攻めてきたぞおおお!!」

男が避難を促している。巨人族？

巨人族：Bクラスの魔物だ、

この程度ならアフトクラトリアの衛兵ならすぐ対処できる程度の相
手のはず…
なぜこんな街中まで…

嫌な予感に城の門のところまで急ぐと、巨人族が…
黒い肌に赤い目…手には大きな金属のようなものでできた棍棒…
足跡が大きくへこみ、棍棒を引きずった跡が
その棍棒の重さと威力を嫌というほどわからせる…

周りには倒された衛兵さん達が横たわっている…
死んではいないみたいだが…ひどく魔うなされている。

倒れた衛兵を見ていると突然巨人族が
持っている棍棒を振りかぶってきた!

慌てて後ろに飛びのいたせいで足元が纏もつれて尻もちをついていると振りかぶった棍棒が目の前の石畳を叩き割った！それだけではなく、その跡にはびっくりするような大穴が開いた！
間一髪でその攻撃はかわせたが、
開いた大穴をビクビクしながらみていた…

「マジでトリスブルに気付いた…」

なんと腰が抜けてしまったのだ！

動けない。うんともすんとも動かない。

お尻に根っこが生えたみたいになく持ち上がらない…

もうダメだと思った。

棍棒が振り上げられていくのがとてもゆっくりに見える…
終わりを確信し目を瞑った…

その時っ！

「纏えエンチャント炎っ！

LEVEL 2！プロミネンス紅炎！」

そう聞こえた直後、赤い髪を靡なびかせて
炎を纏った大剣を振るう見覚えのある女の子の姿が目に入った。

アリスだ！

「とおりゃああああああああああっ！！」

アリスが目にも止まらぬ勢いで巨人族ジャイアントに飛び掛かる！

助かった！

そう、思った。

その時だった。

振り上げられていた棍棒がアリスを薙ぎ払った。

なんとかかつさに剣で防御したものの、
あまりの力に壁に叩きつけられ気絶してしまった。

そして巨人族ジャイアントの目が僕ではなくアリスの方を向いた。

その時倒れたアリスを見て思ったんだ、

「助けなきゃ。」

第07話 「大大ピンチなお話。」（後書き）

改行多いですね今回…

なんというか緊迫感を出すって難しいなって思った今回でした。

感想・お気に入り登録ありがとうございます！

とっても力いただいています！

アクセスも増えて、ものすごくくまにまかせてもらっています！

これからもがんばります！（・・・）

第08話 「僕だって男だってお話。」

「助けなきゃ。」

さっきまで重かった腰がすっ、と持ち上がった。

“甘ったれないで。”

昨日言われた言葉が頭を過ぎった。

そう、確かに甘かったのかも知れない。

手に入れた力の可能性に自惚れてたと思う。

簡単に戦うなんて口にするもんじゃないよね。

お母さん言おうとしてたこと、なんとなくんだけど、

今ならわかる気がするよ。

戦うって事は死ぬかもしれない、

いつでも死と隣り合わせだってことだよな。

それを何の気なしで語るのは戦ってる人達の『覚悟』とか『信念』を侮辱すること。

『命』を軽視すること。

でも今はそんな軽い気持ちでなんて思ってないから…

「流るる雷雲、雲翳、雷霆…」

ここで使うべき力だと思っから…

「紫電の煌き、逆巻く疾雷の咆哮！」

やってやるんだ、僕だって男だ。

「出でよ！雷撃の王の大鎌！」

天高く掲げられた右手にはレントの身の丈よりも倍以上大きく、

紫に輝く雷を纏った大鎌が力強く握られていた。

レントはその大鎌で一閃し、大きな胴を真つ二つに！

そして叩きつけるように振り下ろした！

巨人の体を綺麗に四等分した斬撃の跡が光り輝いている。

そして叩きつけた衝撃で大鎌は特大の雷という

止めの一撃を最後に、粉々になって消え去った。

その雷の光は王都中を包んだ。

その光はとても恐ろしく、それでいて玲瓏^{れいろう}で神秘的だった。

巨人がいた場所には底が見えないほどの深い穴が開いた。
灰になったのか、地の底へ落ちたのか、どちらかはわからない。

でも、

倒したんだ。

僕が。

そうこうしているとアリスが目を覚ました。

「うー…耳がキンキンするー…」

「つてうわっ！何よこの穴！」

「何が起きたって言うのよ！」

「ジャイアント巨人族は？！」

「あの馬鹿でかいのはどこに行ったのよ！」

「あつ、大丈夫？」

「うーんとー…どこいったたんだろっね？」

「何よー！知ってるんでしょー！」

「教えなさいよー！斬るわよー！」

「きつ斬らないでえー！（汗）」

問題が過ぎ去った安堵と清々しさで一杯の午後は、

気付けば雲一つない青空に変わっていた。

第08話 「僕だって男だってお話。」（後書き）

はい！戦闘回でした！

主人公の初活躍ですね！

いやぁ1日3回更新はさすがにへビーでした…

それにしても次のラークの出番はいつになるんでしょう…（笑）

ていうか今気づいたんですがなんかアクセス数が…

なんかすごいことになってますー！！！！！！

うあああああ！ホントにホントに嬉しいです！

ありがとうございますー！

感想・お気に入り登録数もちゃんと見てますー！

嬉しいですー感激ですー（´；；´）

これからもがんばります！

温かい応援、これからもよろしくお願いします！

では次回！

第09話 「ドアはノックしてからってお話。」

「たっ、ただいまー…」

なんだかんだあつたけどお昼過ぎには戻れた。

「おかえりなさい！もうっ！

遅かったじゃないの！

城下に巨人族ジャイアントが出たって聞いて

襲われたんじゃないかってすっごく心配してたんだから！（ウルウル」

「あはは…（襲われたんだよなあ…）

心配してくれてありがとう。

何事もなかったから安心して？」

「…？

んー…まあ無事なら何よりだわっ！

さあお昼ご飯できてるわよ！

今日はおいしいおいしいクリームシチ…」

バタンツ！！！！！！

「レントオッ！

レントはおらぬかー！」

「わわわ！」

おじいちゃん！いるよいるよ！

どうしたのいきなり！（少しちびつたかも…）

「レントツ！」

ちよいとわしと来るのじゃー！」

「ええっ！」

僕まだお昼食べてな…！」

「いいから来るのじゃっ！」

お母さんが腕をぱたぱたさせながら焦っているのを知ってか知らずか、

おじいちゃんは僕の腕をガシツと掴んで

僕を引っ張りながら焦った様子で家を出た。

「いつ、痛いよおじいちゃん！」

自分で歩くよーっ（泣）」

「おお！これはすまんすまん！」

あまりの興奮に我を忘れておったわい…！」

おじいちゃんは慌てて手を離し、

せかせか急ぎながら細道ばかりを選んで通っていく。

「そんなに焦ってどこに連れて行くの？」

僕戻ってお昼ご飯食べたいよー…！」

「何を言つておる！」

今から行くのは 王宮 じゃ！

それでもまだご飯のことなど言っておられるのか！」

「えっ…ええええええええ！なんで？！」

ぼっ、僕悪い事したかな！

もしかして炎の槍使ったのフランマ・ランケア

バレちゃったのかなあ…（ボソッ）」

「違うわい！むしろその逆じゃ！

お前さんが巨人族ジャイアントを討伐したところを

見ておった者が居つての！街ではおぬしの噂で持ちきりじゃ！」

そうこうしていると王宮前までついた。

なんかもう「城」！って感じのお城。

警備はさすがに厳重そう。

そつえば入るの初めてだなあ…

するとかつちよいい鎧の衛兵さんが

「祭祀長様、お話は聞いております。

どうぞお入りください。」

扉を開けるとものつそ長い赤絨毯がずーっと続いている。

絨毯の外側には金の刺繍が目が痛くなるくらいにびっしりと…

ずーっと歩いたその先に王様がいた。

高い玉座に堂々と王様が座っていた

風貌は金髪で、緑色の綺麗な目。

とても優しそうだしすごくイケメンだ。

「やあ！君がレント君か！

いろいろと話は聞いているぞ！

いつもラークが世話になっておるな！」

「はっ初めまして！

ラーク君には仲良くしてもらってますー！」

実は王様はラークのお父さんなのです！

この国ではどんなに王家の人間でも、
成人するまでは普通に育てられる。

実は王様はお父さんとお母さんの幼馴染って聞いたことある。

「やあやあレント君！

すごいじゃないかあ！

ジャイアント
巨人族倒したんだって〜？」

「うわっ！ポルフィさん！

どうしたんですかその格好！」

そこにはシスター姿ではなく、

きらびやかなドレスに身を包んだ彼女の姿があった。

そして彼女は両手を腰に手を当てて誇らしげに、

「ふふふ…ある時は女神父…

そしてある時は！

「この国のお姫様プリンセスなのでーす！」

「ええええええええ！」

「ってことはラークの…！」

「うん！お姉さんでーっす！」

「ドヤ顔が…まぶしい…」

「なんだポルフィ、レント君と知り合いだったのか？」

「うん！レント君の第2属性の儀式を私がやったのよ！」

「おいポルフィ！またシスターごっこか！」

「あちゃっ、言っちゃった…」

「なんか今すごい恐ろしい事が聞こえた気がした…」

「あれ？じゃあラークは？」

「今日はここには居ないの？」

「うーん…」

「どこかでまた女の子と遊んでるんじゃないかなあ？」

「だと思った…」

「ごほん！お二人さん、そろそろ本題に入ってもよろしいかな？」

「あっごめんね、パパ！」

どうぞ進めて進めて！」

一呼吸だけ間を置くと、王様の顔がさっきまでの優しい顔から雄々しい王の顔に変わった。

「レントよ！この度の巨人族討伐の件、
属性を持たない身であるというのに、
まっこと見事な働きであった！
よってこの働きを称え褒美を遣わす！」

そういつと執事っぽい人が腕輪を持ってきてくれた。

「その腕輪は『アニメス・フランクエアレ精神の腕輪』
まあ一種の魔導具でな、えー…魔法を使う仕組みは、
ちゃんとわかっておるな？」

「はっはい、スベル呪文を使って
フルゴル漂う魔素を変換して…
ってことですよね？これなら学校で習いました。」

「うむ、その通りだ。
その腕輪はその変換を助ける。
つまり魔法が素早く出せるのだ。
まあ店で売っている杖を小さくしたようなものだ。
性能は杖なんかとは比べ物にならぬがな。
属性を持たず、魔法の詠唱に時間が掛かる君には、
必要なものではないかな？」

王様は僕にこっさりウィンクした。

「うわぁ！ありがとうございます！
大事にさせてもらいます！」

さっそくつけてみると、

つけただけなのに頭がスッキリした気がする。

「でね、今日のお話はそれだけじゃないの。」

「そうなのじゃ、少し提案があつての。」

重々しくおじいちゃんは話始めた。

「おぬし、旅に出てみぬか？」

第09話 「ドアはノックしてからってお話」 (後書き)

すみません！結局間に合いませんでした(汗)

ブログには書いたのですが昨日は用事がありました…

今度からはあとがきとか活動報告などにも書いておきます…

申し訳ございませんでしたー(; ; ; ; ;)

ついに旅立ちの予感ですねー…

レントはいつたいどんな決断を下すのでしょうか？

お楽しみに！(; ; ; ; ; *)

第10話 「野次馬の中に犯人っているよねってお話。」

「たっ、旅に？僕が？」

「そうじゃ。テロスはおぬしぐらいの年には
すでに世界中を飛び回っておったぞ？」

お父さんが…

「でも急にどうして？」

魔法を使えるって言っても、
まだまだ甘いと思うし…」

「それはじゃな…」

「それは私から話そう。」

おじいちゃんのお言葉を遮るように王様が口を開いた。

「今日の一件、ただ巨人族ジャイアントが入ってきたとは思えんのだ。」

「と、いいますと…？」

「その理由には大きく4つある。」

一つは、王都周辺に巨人族ジャイアントは棲息していないということ。

一つは、衛兵達が巨人族ジャイアントに倒されたわけではないということ。

一つは、混乱に乗じて多数の家屋の金品が多数盗まれていたこと。

最後は、見慣れぬ男の目撃情報がいくつもあること。

この4つだ。」

「えっ、じゃあその男の人が衛兵さんを倒して、
巨人族を街に連れ込んで、

そんでもって混乱に乗じていろんな家に盗みに入ったってことですか？

無理ですよ！短時間でそんなことできませんよ！」

「それは一人での話であろう？」

私はその犯人に心当たりがある。

最近王都周辺に盗賊団が出没しているな。

その盗賊団はゴブリンを従えていると聞いた。

おそらく魔物の密売人と繋がりを持っているのだろう。

そう考えれば巨人族ジャイアントがいたのも頷ける。」

「なるほど…」

もしかして旅ついでにそれを倒して来いって言うんじゃない？」

「うむ、そのまさかだ。」

「むっ、無理ですよ！」

「そんなことより僕行くなんてまだ一言も言ってますん…(汗)」

「なんじゃ、行きたくないのか？」

「テロスのようになりたくないのかのお？」

「いやそういうわけじゃないですけど…」

「まあ焦って決める必要はない、

行くとなればアルカにも話さねばならんだろうしな。

まあ衛兵には自由に通れるよう話は通しておく。

心が決まったら、また王宮を訪ねてくれ。」

「はっ、はい…」

僕はその帰り道にいろんなことを考えた。

旅には行ってみたい。

お父さんも旅をしていたんだ。

いろんな世界を見てみたいとは思っ…

でも戦いは甘くない。

今日だってそつだ。

たまたま勝てたようなものだし。

僕なんか普通に戦ったら生きていられるかもわからない…

だからといって盗賊団のせいだ

街の人達が困ってるのを黙って見ているだけってのも…

まあそれだけならポルフィさんがいるしなあ…

うーん…

ぐうぐうぐうぐう…

お腹…すいたなあ…

なんだかんだで家に着いてしまった。

とりあえず…相談…してみようかな…

「ただいまあー。」

「おかえりなさい！お昼…冷めちゃった…（泣）」

「あはは…ごめんね…」

「あら？その腕輪…魔導具みたいだけど…」

「そんな高そうなものどうしたの？？」

「うーんいろいろとあってね…もらったんだ！

そんなことより相談があるんだ！聞いてくれる？」

「あらかしら？言ってみて？」

「僕が旅に出たいって言ったら…どうする？」

「旅…ですって…？そっ……そんな…」

それを聞くとお母さんは突然倒れてしまった…

第10話 「野次馬の中に犯人っているよねってお話」 (後書き)

いやあ遅くなって申し訳ないです(汗)

なんか目次のとこにやたら「改」の字が多くなったのは

タイトルのとこの話数に0をいれてたら、

やたら書きなおしたみたいにな…(笑)

今回はアルカさん倒れてしまいましたね…

次はシリアス回の予感がしますね…

第11話 「テストは誰でも嫌いってお話。」

「僕が旅に出たいって言ったら…どうする？」

それを聞いた途端にお母さんは倒れてしまった。

倒れたお母さんは間髪を容れずか受け止めることができた。

すると気付いた…

泣いている…

流れる理由のわからない涙を、
僕はただ、ただ、見ていた。

「こんなに軽いんだ…」

今まで抱えたことなんかなかった。
お母さんが軽いのか、僕に力がついたのかはわからない。
でもこの軽さに僕はなぜか憐れささえ感じた。
今離れたら消えて無くなってしまっくんじやないかと思うほどに。

お母さんを寝室まで運ぶと、おじいちゃんが訪ねてきた。

「レント〜！レントはおるか〜？」

王が前衛になれるものの心辺りがおったら言っほしいと…」

「おじいちゃん…、お母さんが…倒れた…」

「なっ…なんじやと…」

僕はお母さんが倒れた経緯を話した…

「そっじゃったか…」

まあいずれ話すつもりじゃったが

話がある、下で話そう。」

下に降りて、いつもの食卓におじいちゃんと二人で座った。

「レント…お前さんはテロス…
お前の父親の話はどれだけ知っておるのじゃ？」

「うーん、みんなが歴史で習う程度の知識しかないかな…
聞いてもほとんど何も話してくれなかったし
僕も父親って言うより英雄だと思ってる感じだし…」

「まあ無理もないわのう…
では少しアルカとテロスの話をしようかの…

アルカは、大のお母さん好きでの。
まあ女の子じゃから普通の事なのかもしれんが…
その大好きなお母さんを小さい時に病気で亡くしてしまうたのじ
や…

それ以来アルカは笑わなくなってしまうた。

そのショックの中で出会ったのが幼いころのテロスじゃ…
奴はアルカをいっつも笑かそうとしてのお…
誰が、どんなことをしても、まったく笑わなかったアルカを
初めて笑わせた奴なんじゃ…

それ以来ずっと仲が良くての。ついに結婚しようた。

それからの奴の活躍はすごかった。
世界中の生還不可能と言われるSランクの依頼を
クエスト
次々解決していきよったのじゃ。

そのくせ帰ってきたときには毎回必ずけろっとしておったわ。

でも奴が旅立つその度、アルカは待っておった。帰ってくることを信じて。

そのそいつがじゃ、世界魔導大戦の最中、

オルデンと刺し違えて戦死した。

あまりに壮絶だったせいかどちらの遺体も残っておらんかったわ…

それ以来アルカは死に異常に敏感での…

ああ振る舞ってはおるが、心のなかはわしにもわからんからの…

おぬしが旅立つことはアルカにとっては、死に等しかったのかもしれない。

帰ってこなかったテロスのように。」

「そつよ…父さん…」

そこには壁に手をついて何とか立っているアルカの姿があった。

「アルカ…もしや聞いておったか…」

「うん…大体ね…」

そつよ、私が不安なのはレント、あなたを失ってしまうこと…」

「えっ…」

アルカは涙を浮かべながら唇を噛みしめ、ゆっくりと口を開いた。

「あなたには戦ってほしくなかった。

あの人のようにはなっただけでほしくなかった…

確かにあの人は立派な人…今でも愛してるわ…

でもね…あなたにはあの人のような危険な人生は送ってほしくないので…

ここ数年で世界はすごく平和になったわ。

この街もとっても治安がいいし一生この街だけで暮らしていける。だから無理にここから出なくてもいいと思ったわ…

平和に暮らせるならそれがいいと思ったの。

でもこういうことを言い出すのはなんとなくわかってた。

あなたの第2属性を聞いた時から。」

お父さんと同じ 絶対記憶 …

「あなたがあの人と同じ道を歩くような気がしてずっと怖かった…」

お母さん…泣いてる…

「そうだったんだ…

それじゃあもしかしてあの時怒ったのって…」

「そうね…あなたに戦ってほしくないと言うのもあったと思う。でも軽い気持ちで戦うとか、力になるなんて言ったのに怒ったのもホントよ。」

覚悟もなく戦地に立って死んでいく人を何人も私は見てきたから

…」

「そうだよね…でもお母さん、僕はもう軽い気持ちで魔法を使ったりなんかしないよ。」

この力で困ってる人を助けたい。いろんな人の役に立ちたいって思うんだ。

だから僕は…旅に出たいって思う。お父さんのように立派な魔法使いになりたいって。」

「レント、あなたは私が『なるな』といった人になろうとしてるのよ！」

戦うってことは『死ぬかも知れない』ってことなのよ…」

「死なないよっ！…！！！」

僕は間髪いれずに答えた。

「……。」

お母さんはしばらく黙った後、

「本当にどこへ行っても生きて帰ってくるのね…?」

「うん、約束する。」

僕がそう答えたせいで少し厄介なことになる。

「ならレント、あなたを試させて。」

第12話 「地下って暗くて怖いよなってお話。」

「た、試すって?」

「明日闘技場とある魔物と戦う者を募ってるわ。」

「そこでその魔物を倒せたら、旅にでもどこへでも行っていいわ。」

「その魔物って言うのはなんていうの...?」

「『双角魔獣ベヘモット』」

聞いたことないなあ...と思っているとおじいちゃんが、

「アルカ、正気か! Aクラスの魔物じゃぞ! それもベヘモットとは! 死なせたくないなどと言っておる癖に

これでは言ってることやってることが違うではないか!」

「えっ...そんなに強い魔物なの...?」

「強いなんてものじゃないわい!

まず、圧倒的な力! 速さ!

人間なんぞとは比べ物にならぬ！

そのうえ頭がよく、魔法に長けておる！

もう反則みたいな魔物じゃー！」

「ええっ！そんな！

それじゃあ僕に倒せるわけないじゃないか！」

「そうね。だから選んだのよ。諦めなさい。

まあ戦っても医療班がいるし死にはしないでしょうけど、

一生戦う気が起きないくらいに叩きのめされるでしょうね。」

「バカを言え！レントが死にかけてもいいというのか！

お前の息子じゃろう！どうかしておるぞ、アルカ！」

「いいわけないでしょう！

だから…諦めて、レント。お願い…。」

「…おじいちゃん、稽古つけてくれないかな。」

「なっ！おぬし…」

…うむ、わかった。ついてこい。」

「バカ…。」

俯くお母さんを尻目におじいちゃんと家を出た。

「おじいちゃん、これからどうするの？」

「とりあえず図書館へ行くぞ。職権乱用タイムじゃ。」

「…？」

図書館へ着くといつものカウンターのお姉さんが。

「さっ、祭祀長様！今日はどのようなご用件で？！」

「ちよいと必要なものがな…今日は…」

なんだかこそこそ話している。
するとお姉さんが、

「わ、わかりました、ご用意しておきます。」

「うむ、頼んだぞ。」

「よしレント、本を用意してもらってる間に、
行くところがある。ついてくるのじゃ。」

おじいちゃんはそういうと入口から見て右側にある
衛兵さんが守る扉の方へ歩いて行った。

「おっ、おじいちゃん…庭に出るなら左の扉だよ？」

「庭に出るとは言っておらんじゃろっ？」

「でっ、でもそっちって地下への階段…」

「そうじゃ。まあついてこい。」

衛兵はおじいちゃんを見ると急いで道を開けた。

扉を開ける。しかし真っ暗だ。

おじいちゃん一歩足を踏み入れパチンと指を鳴らすと、
青い炎が階段のランプに灯った。

「行くぞ。」

長い長い螺旋階段。

地下特有の湿った空気。

二人の足音が長く響く。

「うう…なんか怖いよー…」

「男の癖になよなよするでないわー！」

長い長い螺旋階段が終わると一枚の扉が。
それを開け放つとそこに開かれた空間が現れた。

「ここが三級禁忌魔導書庫じゃ。」

「もしかして僕に禁忌を教えるってこと？（汗）
僕悪い事はしたくないよー（泣）」

「安心せい、孫にそんな危険なもの教えたりせぬわ。
こつちじゃ。きつと驚くぞ。」

おじいちゃんは歩きだし、

本棚がずらつと並んだうちの一つの本棚の前で止まった

今まで隙間のある本棚はなかったのに、

上から三段目の右端だけ本一つ分の隙間がある。

おじいちゃんはその段の本をテキパキ入れ替えた。

すると空いていた右端に本棚の内側の壁が開いて一冊の本が出てきた。

「これじゃ。」

「これは…魔導書…？」

「それはの、テロスがおぬしのために書いた本じゃ。
わけあってここに保存してあったのじゃ。

おぬしが戦う意志を示した時に渡せと言われての。」

「お父さんが!？」

僕はその本を開けてみた。

見た感じ無詠唱呪文ノンキャストスベルを集めた辞典…
でも一つだけすごく長いのがある…召喚呪文サモンズベル…かな？

パサツ…

紙切れが出てきた。

「なんだろ…」

拾って読んで見ると、

『フォティアへ発たて。』

フォティアって…違う大陸だよね…

「そろそろ行くぞ、目当てのものは手に入れた。
まだまだやることはある。行くぞい。」

僕は紙切れをポケットに入れ書庫を後にした。

地上に戻るとお姉さんがたくさんの本を用意してくれていた。
20冊はあるかな…

こんなに借りても大丈夫なのかな…？

「ありがとう、助かった。給料あげてもらえるように頼んでおくから。」

「ホントですか！やった！」

なんかおじいちゃんずる…うつん、なんでもない。

「よし、レント、わしの家で特訓じゃ。行くぞ。」

「そつ、それはいいんだけどこんな量の本持って歩けないよ（汗）」

「それも特訓のうちじゃ！文句を言つな！」

なんとかかんとか持って外に出ると、おじいちゃんの家に向かった。

第12話 「地下って暗くて怖いよねってお話。」（後書き）

特訓のお話が長すぎてこっさり前編と後編で分けてたりします。

気付いたらめちやくちや書いちゃったりで…（笑）

えー最近思いついたのがちよつと予約投稿を駆使して、

毎日決まった時間に更新できるようにしようかなとか…（ボソ

書き溜めておいた方が精神的に余裕ができるかなとか思いました）

汗）

ちゃんとした時間が決まりましたら活動報告、ブログなどで

報告いたしますので、見ていただけると助かります。

ではまた次回（、・・・*）

第13話 「男はポインに弱いってお話。」

おじいちゃんの家に着くと、

重たいたくさんの本を庭に置きその場に座り込んだ。

「ぐはー…疲れたー…」

「なんじゃなんじゃ、疲れてる場合ではないぞ。

残された時間は少ないんじゃないぞ。」

「うー…わかったー…」

ぐったりした僕を気にせずおじいちゃんは話を切り出した。

「とりあえず今おぬしが使える魔法はどの程度じゃ？」

「えっと…火・水・土・風・雷・氷・光・闇・無の中級魔法までと、
武器やらなんやらを召喚する簡単な召喚呪文…サモンスペルくらいかな…？」

「なっ…結構やりおるな…これはもしかするともしかするかもしれぬ…」

今日お前さんが持って歩いてきた本は全属性の上級魔法を含めた

魔導書と、

マギック・ブックス
古代魔法と呼ばれる強力な魔術の書、

そしてあらゆる攻撃に対する防衛術の書、

あと詠唱効率上昇に関するもの、簡単な治癒魔法、補助魔法の書。

こんな感じじゃの。とりあえずこれを全部読んで覚えるのじゃ。」

「うわっ…多すぎるよー…」

無茶なこと言うなあおじいちゃん…

「うー…わかった、やってみる。」

「おっとそのまえにじゃ、テロスの本には何が書いてあった？

わしも中身は見ておらんからの、どんなことが書いておったのじや？」

「えっと、なんか無詠唱呪文と…」

あとすっごい長い召喚呪文だったかな？」

「ほう…その召喚呪文ちよっと唱えてみせい。」

「うん、わかった。あつちよつと棒とかあるかな？

魔法陣みたいな書いてあったから多分書かないと…」

「おおそうかそうか、うーむ…」

おっ、ほうきがあったぞい。」

僕はほうきを受け取ると、ほうきの持ち手の方を使って魔法陣を描いた。

「じゃあ、唱えるね。」

踊る炎、滴る水、母なる大地、そよぐ風。

唸る雷鳴、舞う吹雪、包む光、潜む闇。

我、汝を求め、汝を呼ぶ。

今こそ姿を現せ！我が分身！」

すると魔法陣が七色に輝いた！

中には生き物の気配がする…何かがある…？

大きな光の柱が魔法陣を中心にどんどん大きくなっていく！

光が治まると魔法陣の上に大きな鳥が翼をたたみ、佇んでいる。

真紅に染まったその体は炎を身に纏ったかのように力強く美しい体。

“私を呼んだのはあなた様ですね？”

「わわっ！頭の中に話しかけてるの！？」

どっ、どっということなの！？この鳥さんは誰なの！？」

「その鳥はおぬしの使い魔じゃ。」

その魔法は使い魔を召喚する儀式で使うものじゃよ。

使い魔は人それぞれの性格や素質を具現化するものじゃから

儀式を行ってみるまでどんな使い魔が出てくるか誰にもわからん。

それにしても不死鳥とは…フェニックスレント…おぬし…いつたい…」

“落ち着いてくださいな。念話が苦手ですわいらっしやいますか？”

「うっ、うん…初めてだから…ちょっとびっくりしただけ…」

“もしよければ人の姿になることもできますが…いかがいたしまし
よう？”

「あっ…できればそうしてほしいな…」

不死鳥は翼を大きく開いて一声鳴くと、
体が輝き、見る見る人の形になってゆく！

「おっ、おぬしメタモルフオーゼ変身できるのか！？」

それも女とは…なんとも豊富な胸…ぶはっ…」

おじいちゃんは大量の鼻血を吹いて倒れた。

それにしてもこの人…

肌は白くて、艶のある銀髪…青く透き通った眼…

さっきの姿からは想像もできない落ち着きのある姿…
ため息が出るほど美人だ…

「申し遅れました、私の名はウィータ。

以後よろしくお願いしますね、マスター。」

「よっ、よろしく、ウィータさん！

僕はレント、普通にレントって呼んでほしいな！

ほらマスターなんて呼ばれる器じゃないしさ！」

「そっ、そういうことでしたら私もさんなどつけずに
呼び捨てで呼んでいただきとっございます！」

「う、ウィータ…／／／」

「れ、レント…様／／／」

なっ、なんだろうこの空気…／／／

…

「なんじゃなんじゃ、初心はつしんなカップルかおぬしらは。」

「「うわっ!」」

「何を驚いておるのじゃ。」

「おじいちゃん!いつから起きてたの?(滝汗)」

「いつからも何もすぐに起き上がったではないか。」

「そつ、そちらの方はレント様のおじい様でいらっしやいますか?」

「うむ、グラオヴェンじゃ。よろしく頼むぞい。」

見たところ人間メタモルフオーゼに変身できるようじゃが…
獣人ヴェンステイアかの?」

「いえ、そうではありません…」

魔法で人間、獣人になることができます…」

「なるほど…知能が高いとは聞いておったが
わしも初めてお目にかかったからの…」

「わぁ…ウィータすごいんだね…」

「いつ、いえ、そんな… / / /」

ウィータは頬を両手で押さえくねくねしている。

「おぬし、使い魔というくらいじゃ、
前衛か？それとも詠唱補助かの？」

「どちらも心得ております。

前衛の時は獣人の姿で槍を携え、
補助の時は人の姿で詠唱をお助けいたします。」

「心強い限りじゃ。

闘技場には使い魔を連れて参加していいからの。」

「レント様は闘技場に出場されるのですか？」

「うーん、わけあってね… (泣)」

「まあそういうことじゃから連携の訓練などもせねばな。

もしかするとテロスの本にあったノンキャストスベル無詠唱呪文は、

ウィータに命令したりするものか何かかもしれんな、あとで確認
してみようぞ。」

「へえ… (命令…か…)

便利そうだね…」

「おぬし今えっちなこと考えたじゃろう？」

「かつ、考えてないよ！ (なんでばれたの！)」

「そ、そのようなことでしたら…／＼／」

「ウィータもなんで顔赤くなってるの！」

「そういえばレントよ…」

「重大なことを忘れてはおらんか？」

…

「あ…特訓…」

「そうじゃ、とりあえず防衛術の特訓じゃ。

すばやく出せるようになるまで何度も繰り返しぞい。

これが終わったら連携の訓練じゃからの！」

訓練は夜遅くまで続いた。

僕はそのままおじいちゃんの家泊まることになった。

寝室には鳥の姿で横たわるウィータ。

ベッドの中で魔導書を読み返していると、
気付けば眠ってしまっていた。

第13話 「男はポインに弱いってお話」 (後書き)

今回のお話から毎日午後9時に自動的に公開されるようになります！
新キャラウィータが加わって、

そろそろ色恋沙汰が始まる予感がしますね。

次回はちよつとした番外編。

お楽しみに…

*番外編 「世界観についてのお話。」

「どうも、るのでございます。今日は番外編ということでは…」

「おいおい、なんで俺がここに呼ばれたんだ？」

「ラーク君は最近出番が少ないからしようがなく呼びました。」

「…(；；、)」

「いつか出番来るから！ね！泣かないで！」

「おっ、おっ…(泣)」

「でね、今日は世界観についてお話ししようと思うんだ。(、。(

。(、(」

「ほうほう、俺達が住んでるイリュシオンについてか？。(。(」

「そうだね、ブログではもうお話したんだけど、

今日は見てない人のためにいろいろと説明させてもらうね。

もちろん見てくれてる人がいるかも知れないから、新しい情報も公開するよ！」

「ブログ…？」

「こっちの話だからラーク君は気にしないでいいよ(汗)」

ラ「おっ、おっ…じゃあまず何から説明するんだ？」

ろ「そうだね…じゃあまずイリュシオンを形成する6つの大陸から説明するね。」

この世界は、

火属性の大陸『フォティア』

水属性の大陸『ネロ』

土属性の大陸『ティエラ』

風属性の大陸『アリア』

氷属性の大陸『キユール』

雷属性の大陸『フルゲル』

の6つからできているんだ。ここまでは知っている人もいるかも。

今回はその大陸の特色について少し。」

ラ「ほう、俺もほかの大陸については疎いからな…（；）、（；）」

ろ「ラーク君…それでも一国の王子かい？」

ラ「（；A；、）」

ろ「じゃあ、説明していくね（真顔）」

ラ「むっ、無視…（；皿；、）」

ろ「まずはフォティアから。」

大陸の中心に大きな活火山があり、

大陸の半分以上が熱帯林に覆われているのが特徴。

年中温かい気候に恵まれ、海がきれいで、果物がおいしくて、

温泉が多いことでも有名なりゾート大陸です。

熱帯林には多くの魔物が住んでいて、とつても危険。

まだ見つかっていない魔物も多いかも知れませんか。」

ラ「なるほどな…」

美人が多いって噂だけどそこらへんはどうなんだ？」

ろ「次はネロです。」

この大陸は海拔マイナス100mという場所にある特殊な大陸

です。」

ラ「また無視ね…orz」

ていうかそれって沈んでないか？（；、；）」

ろ「いや、そんなことはないんだ。」

ちゃんんと立派な大陸なんだよ？」

大陸の周りが大きな滝に覆われてるイメージをするとわかりやすいかな？

この大陸は6大陸一魔法が発達している大陸で、その至る所に魔法が使われていて、大陸一つが丸々大きな都市と化しているんだ。」

ラ「なんかすごそうだな…」

でもそこに行くとなったらどうやって行くんだ？」

る「おっ！いい質問だね！

実は一週間に一度浮上するんだ。

なんかすごいよね！さすが6大陸一って感じだね！

次はティエラだ！」

ラ「それは俺に説明させてくれ！

ティエラは土属性の大陸、過ごしやすい気候で人口が一番多いんだぜ！

その大陸の『王都アフトラトリア』に俺達は住んでる！

大学、図書館、闘技場、ティエラのギルド総本部…

いろんな施設に恵まれた都市で、治安もよく、

福祉も充実してて、貧困格差とかもほとんどなく

とつてもいい街なんだぜ！」

る「それ僕がブログで言った…」

うーん、まあいつか…」

次はアリア、風属性の大陸だね。」

ラ「おっ、俺が一番気になってる大陸…」

まったく情報が入ってこないんだけどどんな大陸なんだ？」

る「まあ無理もないね。
だって浮遊大陸だから。」

ラ「飛んでんのか！ぶつたまげたぜ！」

る「そう、飛んでるんだ。

長い間ほかの大陸との関係を持たなかったせいで、
独自の文化を発展させてきた大陸なんだ。
今でも極々限られた人しか入れない。」

ラ「なるほどなあ（、、）
にしてもどうやって飛んでるんだろうな（。ゝ。ゝ）」

る「次はキュールとフルグルだ！」

ラ「また無視かー（；；、）」

る「この二つの大陸には人間は住んでいないんだ。
キュールはいつも吹雪が吹き荒れていて、
氷河期真っ只中です！みたいな大陸。
フルグルは年中雲に覆われ、大陸全体が湿地になっている。
どちらも魔物の巣窟みたいになってるから
許可がないと入れないよ。」

ラ「たまにマニアなハンターが集まって大会をしていることがあるな。
どれだけ大物を狩れるかってね。」

る「なんやらかんやらこんな感じで世界が成り立っております（、、）
（、）」

ラ「ふう…これでまた俺は出番のない生活が…（泣）

ろ「まあまあそう落ち込まずに…

修行頑張ってるんでしょ？」

ラ「それは秘密だつて言ったじゃないかよ！」

ろ「えー、では！

ろのとラークのイリュシオン講座を終了します！
次回をお楽しみに！」

ラ「また無視かー（；；；）」

***番外編 「世界観についてのお話」 (後書き)**

ラーク君の立ち位置が決定しましたね。

彼はこれからも無視され続けるでしょう。

次回からは本編、ついに闘技場へ出場。

レントの旅立ちの日は来るのか!?

なーんてね(笑)

第14話 「実況さんってテンション高いよねってお話。」

「レント様、朝にございます。」

僕はウィータの優しい声で目を覚ます。

「うっ…おはよう…今起きるよっ…」

ゆっくりと上体を起こす。

ぽふっ。

なんだか顔が幸せな感触に包まれている気がする。

うん、これはいい枕になるぞ。

なんだろうなこれは…

あっ、おっぱいか、そっかそっか。

…

おっばい？

「うわあああああああああああああああ！」

僕はものすごいスピードで後ろに下がった。
そのせいでベットの柵の所で腰を打った。

「ぐはっ…！じっ、じめん！そういうつもりじゃなくて！」

「いっ、いえお気になさらず…／／／」

「きっ、着替えるから下で待ってほしいな…」

やっ、やわらかかったな…

じっ…

∴ / / /

僕は着替えて、さっきの感触の余韻に包まれながら下へ降りた。

「おはようさん、よく眠れたかの？」

「うん、おかげさまで。」

「エントリーはもう済ませておる。

今日の夜だそうじゃ。それまでに控室に入っておれとのことじゃ。

「

「うん、わかった。

ていうか僕申し込んだの僕一人じゃないよね？
どれくらいの人がエントリーしたの？」

「おぬしともう一人じゃな。

レント、ルールは把握しておるかの？」

「うん、わかんない（汗）」

「なら説明するぞい。

いつもなら選考会で選手同士が戦って、
ある程度人数を減らしてから闘技に入る。

闘技は第1、第2、第3ラウンドに分かれておる。
ラウンドを重ねるごとに強いモンスターが現れる。

そして合計3ラウンドを一番早く突破した者が

最終ラウンドに進める、というシステムになっておる。

その最終ラウンドにお目当ての魔物がおるわけじゃが…
今回はその選考会が行われないのじゃ。ラッキーじゃな！」

「おお！ラッキーだね！
でもその人に勝たなきゃ戦うこともできないんだよねえ…
どんな人なんだろう…」

「ああ、それはラークじゃ。」

「えっ！なんでラークが！
最近出番少ないのに！」

「出番が少ないのは触れてやるでない。
なんでもギルドで活躍中だそうじゃぞ。
腕試しに出場するとかなんとか。」

「そっ、そうなんだ…」

みんながんばってるんだなあ…
にしてもラークかあ…
戦ってるの見たことないから何とも言えないなあ…

「そういえばちよいと商店街に用事があるのじゃ。
ちよっとなついてくるのじゃ。」

「うん、わかった。」

ウィータはどうする?」

「私もご一緒いたします。」

僕等は3人で商店街へ向かった。

今日は晴天に恵まれ、商店街は多くの人でごった返している。

「おじいちゃん、今日は何か買う物でもあるの?」

「ちよいとおぬしにプレゼントじゃ。」

そうついてついたのはボロっちいお店…

何か店頭に出ているわけでもない…

今この時点では何の店なのかもわからない…
あるのはカウンターだけだ。

「じゃまするぞい。」

「おお、グラオヴェンか…

頼まれたものは仕上がっておるよ。」

奥から髭の長い小さなおじいさんが出てきた。

カウンターに顎を乗せてひよこつと顔を出している。

「今持つてくるからちよつと待つててね。」

と持つてきたのはごく普通のローブ…?

「これは地獄の羊の毛で作ったローブですね。」

インフェルノ・アリエス

「おつ、お嬢ちゃんよくわかったね。
そう、インフェルノ・アリエス地獄の羊の

毛は約1,200 という高温で真つ赤に燃えているんだ。

死ぬとその毛は茶色に変色して温度も下がるんだけど、

その毛は火属性への耐性が恐ろしく強いんだ。

そのせいで一時期乱獲されてね。

今では数が少ないから狩猟を禁止されていて、

自然に亡くなっている子からしか刈り取れないんだ。

だからとっても希少な毛。それで作ったローブなんだよ。」

「そうなんじゃ、おぬしが戦うべへモットは火属性の魔法を使う。
あればいいと思ってな。無理を言つて繕つてもろうた。」

「わあ！ありがとうございます！」

「いいのだよー。そのかわり、大切に使うておくれよ？」

「はい！もちろんです！」

僕等はローブを抱え、店を出た。

「そういえばそろそろラークの闘技が始まるぞい。

見に行つてやるかの？」

「う…：みたいようなみたくないような…」

「レント様、出てくる魔物を見るだけでも

参考になるのではないでしょうか？闘技はレント様一人ですし…」

「え、闘技って一人でするの？（滝汗）」

「そうじゃよ？最終ステージのみ使い魔が連れて行けるのじゃ。」

「なっ、なんで…？」

「連れてきても苦戦するようなレベルの相手じゃからじゃ。」

闘技場での賭けの倍率が負けに偏ってしまつては面白くないから
の。」

「うっ…一人でできるかなあ…」

「大丈夫です。」

レント様ならきつと。」

「うん…がんばる…」（泣）

とりあえずラークの闘技を見に行こう。」

アフトクラトリア闘技場…

一年中魔物の咆哮が響く、歴史ある闘技場。

ここは国が賭け事をを認可している場所。

しかし裏では規則を大きく破る高レートでの賭けが、
行われているという噂があるが、定かではない。

「よし、とりあえず席確保じゃな。」

「あつ、そろそろ始まるみたいですよ！」

『みなさんおゝまたせしましたああああ！』

「今月の闘技は火属性の魔物で統一されている！
まっさつに炎のペアアアアッラダイス！」

「実況の人…テンション高いね…」

「べへモットの熱にやられてるんだと思います…」

『さあ！今日最初の挑戦者！女たらしの王子様！
ラアアアアアアアアアック！』

僕から見て左側の門からラークが出てきた。

女の子に手を振っている…はあ…変わらないなあ…
にしても可愛そうな称号だよね…（白目）

「静かにみたいね…」

「残念ながらそういうところではありませんからね…」

『えー今回は秋季最後の闘技となります。』

秋季の最速タイムは絶対零度コンヘラル・ステッラの流星でおなじみの
ポルファイ選手の3分21秒です、さあラーク選手、この記録を超
えられるか！』

「ぽっ、ポルファイさん!？」

「あの人ここでも活躍してるんだ…」

『第1ラウンドのモンスターは』

ヘルハウンド
地獄の猟犬3体、

第2ラウンドのモンスターは

フレイム・リザード
業火の蜥蜴2体

第3ラウンドのモンスターは

ケルベロス
煉獄の番犬1体

というラインナップになっております！
おっとおそろそろ準備が整ったようです！
では始めます！いきますよ！

レディイイイイイ…

ゴオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

合図とともに3匹の血に飢えた獵犬が放たれた！

3匹散り散りに分かれたあと、
ライクの方へ全速力で走っていく！

真っ赤に燃えるその体がラークの方へ全速力で向かう！

『さあ！今始まりました！』

おっと、ラーク選手が使っているのは魔導銃かつ！？』

雷鳴にも似た銃声が2、3発響いたあと、一体目が倒れた。

『おっと早くも一体目！』

このペースだと記録更新かああ！？

ラーク選手はもう一丁の銃を取り出したああ！

一二丁拳銃だあああああああ！』

数えられないほどの弾丸の雨が残り2体を八千の巣に変えた。

『終わったあああああ！』

早い！早すぎる！

ポルフィ選手を超えるペースで第1ラウンド終了だあああああ！』

なっ、なにこれ…
すすきるよ…ラーク…

第14話 「実況さんってテンション高いよねってお話。」（後書き）

いやあ…レントも出すつもりだったんですがどうも長くなりますね…
戦闘シーンはかなりかさばりますね…覚えときます…

そういえばお気に入り登録が20件を突破いたしました！

ホント…嬉しい限りですっ（´；；；´）

評価をくれた方もいらっしやるみたいで、

とても光栄に思いますです！

本当にみなさんありがとうございます！

これから精進します！

あと携帯からのアクセスも多いのですが

とても見づらと思うので、いつか携帯でも

見やすい改行にしていこうと思ってます！

できなかつたらごめんなさい…

ではまた次回！

第15話 「二丁拳銃は男のロマンってお話。」

「すごい…すごいすぎるよ…」

僕は驚いていた。

あまりの記録に心から喜べない自分。

「魔導銃…フルゴル魔素を動力とし、弾丸を打ち出す銃…」

さっきの雷鳴は、おそらく弾丸に雷属性を付加したのでしょうか。それにしてもすごい威力だった…強敵ですね…」

「うん…自信なくなってきたなあ…」

「レント様なら大丈夫。『いよいよ第2ラウンドだあああああああ！』」

117

「ん？今何が言ったかな？」

「いつ、いえ何も…（実況のせいで…泣）」

第2ラウンドは業火のフレイム・リザード蜥蜴か…

どんな魔物だろ…

『さあ第2ラウンドだ！』

準備はいいか!?

レディイイイイイイ…

ゴオオオオオオオツ！
」

試合が始まり魔物が放たれた！

すると業火フレイム・リザードの蜥蜴達は、

ラークに向かって3mはあろう大きな球状の炎を大量に吐き出した！

するとラークの下の地面が盛り上がって、

ドンツとラークを上に跳ね飛ばした！

ラークは弧を描きながら宙を舞う。

そしてラークは目標の頭上まで達した。

そして真下にいる業火の蜥蜴フレイム・リザードに向かって

大量の弾丸の雨を降らせた！！！！！！

相手はひとたまりもない！

しかし一匹は倒れたが残りの一匹が生きている！

生き残った一匹が後ろ向きに着地したラークを襲う！

しかしラークは振り向きもせず

飛び掛かってきた相手に一発お見舞いした。

『終わったあああああああ！』

これまた早い！敵が弱く見える！

しかし決して弱いわけではない！彼が強すぎるのだあああああ！』

「あの方は2属性操る方なのですか？」

「うん、土と雷だよ、さっきのジャンプもそうかな？」

「おそろく…」

土と雷は相反する属性なのに華麗に使いこなしている…

相手はなかなかの手練れですね、レント様…」

「ううっ…言われなくてもわかってるよー（泣）」

『さあさあ第3ラウンドだあ！』

次はそう簡単に行かない相手だぞおおおお！

ケルベロス
煉獄の番犬だあああああ！

ラーク選手はこの相手、どう料理するのか！

では、始めます！

向かってきた！すごい勢いだ！

ラークはまた地面を隆起させた勢いで宙を舞う！

魔導銃が背中を捉え、弾丸はその背中を貫いた！

ダメージはある、しかしまだラークへ攻めてくる気だ！

またラークの方へ向かっている！

するとラークも向かってくる煉獄ケルベロスの番犬へ走る！

このままでは危ない！

と思ったその時！

ラークはスライディングで脚の間を潜り抜け、

煉獄ケルベロスの番犬の腹に何発も打ち込んだ！

倒れかけてふらふらになっている！

止めは大きな雷だった。

「フリッツ・ジャベリン
春雷の投槍！！」

『決まったああああああ！』

あの煉獄ケルベロスの番犬を！
恐ろしいスピードで倒してしまっただあああああ！！

控室に入った僕はローブを羽織ってベンチに腰かけた。

大丈夫なのかな…

まだ魔法を使い始めて間もない。

やっぱり自信…ないよ…

足取り重く控室を出て門の方へ向かうと
二人が待っていてくれた。

「いよいよじゃな。」

「うん…でも自信ないよ…」

「大丈夫じゃ。」

旅へ出るんじゃない？

旅に出たくないのかの？

「そつ、そんなことないよ！

ただ…相手がラクだしさ…

あんなすごい記録出されたら…」

「安心してください、レント様。」

「えっ？」

「レント様の火力はあんな魔導銃まどうじゆうとは格が違います。第1ラウンドが終わる頃にはその不安も無くなりましょう。ですから大丈夫です、レント様…」

「そうじゃ、おぬしはまだ自分のすごさに気付いておらん。行って来い！おぬしの覚悟を見せてやるのじゃ！」

無言コクツと頷き、僕は門を出た。

大丈夫だよな。僕は男だ。

旅に出るんだ。みんなを困らせてる人をみんなやつつけるんだ。

行くぞ、レント。

『本日2人目の挑戦者は未知数の実力！』

実績もクラスも全く情報がないが、ただ一つ入った情報は基礎属性を持っていないという特異な体質だということ！

さあそのハンデを背負ってどう戦うのか！むしろ戦えるのか！？

みなでお手並み拝見と行こうじゃないかッ！

新進気鋭のダークホース！レントオオオオオオオオオオオオ！』

いつ、いろんな人が見てる…（汗）
お、お辞儀しとかないと…

『おっとレント選手、ペコペコお辞儀をしている！
なんて礼儀正しいんだ！』

観客の笑い混じりの拍手と歓声に包まれながら立ち位置につく。

『さあ！準備はいいか！』

始めるぞ！魔物は前回と同じ地獄の獵犬3体！

ヘルハウンド

ではいくぞ！レディイイイイイイイイイイ…

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

「デス・ファレナ
死の鯨…」

第15話 「二丁拳銃は男のロマンってお話。」（後書き）

やっぱり戦闘ばっかりだとなかなか量が…

闘技場のお話はもう少し続くので、

なかなか大変そうですね…（、；、；、）

そして、いつもお気に入り登録などありがとうございます！

お気に入りユーザー登録も気軽にいただけると嬉しいです！

基本的にメッセージでも感想でも何でも、

必ずお返しさせてもらいたいと思ってるので気軽に！

何とぞ気軽にお願います！（、、、）

ではまた次回！

その水圧に押し潰された猟犬達の血が滲み、試合終了の時に押し潰された猟犬達の死体と赤く染まった大量の水が残っていたというわけだ。

『アンビリーバボオオオオオオオオ！』

なんだこのルーキーは！ありえない！

あの猟犬達を秒殺したああああああ！

それも上級魔法を無詠唱ノンキャスト！？

属性がないという噂は嘘なのかー！？』

「レント様は次のラウンドからですよ。」

ここからどんどんノツていくんですから…」

「ふふふ、そうじゃな。」

楽しみに見ておくとするかの。」

『さっ、さあ！』

次の魔物は業火フレイム・リザードの蜥蜴！

こいつらは一筋縄では行かないぞ！

しかし、レント選手は水属性！次はどんな大技を見せてくれるのか！？

さあ準備はいいか！？

では行くぞ！レディイイイイイイイイイイイイ…

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!

合図と共に業火フレイム・リザードの蜥蜴が2匹同時に飛び出してきた!

「ツイン・トレノ・レイ・ガードニア雷撃の王の双鎌!」

両手に現れた二つの雷を纏った大鎌を2匹に向かって投げつけた!

どちらも鎌が刺さって動けない上に、痺れて力を入れることすらできない!

「ウェルテックス・モール・トレンス逆巻く死の激流!」

大量の水が柱となって業火フレイム・リザードの蜥蜴を襲う!
その衝撃で形を止められなくなった大鎌は、大きな雷を水中に放った!

魔法がおさまるころには動かなくなった死体が二つ。

「決まったあああああああ!」

水の柱の中に閉じ込めたうえに！

足止めしていた雷属性魔法で、

フレイム・リザード
業火の蜥蜴感電死！

なんという少年なんだあああああああ！

鬼か！？悪魔か！？いや、それ以上だあああああああ！』

「ノツてきよつたのお！」

「そうですね！とても良い連携技でした！

次で最後です！いけますよ！レント様！」

『さあ次は煉獄ケルベロスの番犬だ！

弱い方だとはいえAクラスのモンスターだ！

簡単に倒せるような奴じゃないぞ！

さあ準備はいいか！ラストだぞみんな！

行くぞ！レディイイイイイイイイイイイ…

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

合図と共に煉獄ケルベロスの番犬は、
鋭い爪を立てながら飛び掛かって来た！

しかし、

「グラキエス・フォルモント
零下の満月！」

唱えた瞬間飛び掛かって来た煉獄ケルベロスの番犬は、
放たれた光に包まれ空中で凍らされ、
レントの頭上を通り越し、地面に落ちた。

そして止めと言わんばかりに、

「サウザンド・フランマ・ランケア
千の炎の槍！」

大量フランマ・ランケアの炎の槍が
凍った煉獄ケルベロスの番犬粉々に砕いた！

「終わった…終わったああああああ！
Aランクのモンスターケルベロス煉獄の番犬さえも秒殺！
さらにレント選手4属性も操れるという事実！

これは祭祀長の3属性よりも多い！ということはこの街で一番の天才だあああ！」

「なっ、なんだかちよつとしょんぼりするのお…」

「おっ、お孫さんなんですから継いだと思えばいいのでは？」

「なるほど！それはいい考えじゃ！さすが我が孫じゃの！」

それにお金もガツポガツポじゃあ！はっはっはー！愉快愉快！」

「もしかして孫にお金賭けてたんですか…それってどうなんでしょ…」

「ぎくつ。(滝汗)」

『さあ注目タイムの発表だあ！
レント選手のタイムは…』

1分48秒！

すごい！すごいすぎる！

リーグ選手の記録を大幅に塗り替えるあり得ない記録だあああああ
あ！

そして！見事ベヘモットへの挑戦権を得たのは、

このレント選手だあああああああああ！』

第16話 「本気はこんなもんじゃないってお話。」（後書き）

いやぁ…魔法のオンパレードな回でしたね…（、。。。、。；）
若干チート臭がしますが気にしないでください！！

ちゃんと考えて書いてますから！仕様ですから！（汗）
いつもお気に入り登録などなどありがとうございます！

最近はこちらと読者さん達と交流したいな…

と思ってる次第でございます…（、。。。、*）

なのでメッセージや感想など、気軽にしてほしいです！

お褒めの言葉でもダメ出しでもなんでも構いません！

どしどしよろしく願っています！

ではまた次回！（ちなみに褒めて伸ばされたい派です。）

第17話 「戦つて女は美しいってお話。」

「すごい！すごい！」

ラーク選手の記録を大幅に塗り替えるあり得ない記録だあああああ！
あ！

そして！見事ベヘモットへの挑戦権を得たのは、

このレント選手だあああああああああ！」

「わ！やつ、やった！

勝ったんだ！わ、わーい！（汗）」

レントはぎこちなく拳を天に突き上げると、

闘技場は大きな歓声に包まれた。

「勝ちましたよ、レント様が！」

「おお、そうじゃなそうじゃな！

しかしここからが問題なのじゃ……」

『さあ！レント選手には、このままAランク、

いや、実力はSランク相当であろう！

あの双角魔獣べへモット戦っていただけです！』

「おじいさま、そろそろ私の出番のようですね…」

「うむ、レントのこと、よろしく頼んだぞい。」

『出でよ！燃え盛る魔獣の王よ！

双角魔獣べへモットの登場だあああああああ！』

合図とともに大きな魔法陣が！

そしてべへモットが姿を現した！

大体一軒家一戸分くらいの高さで、

鋭く前に突き出した長く、大きな一本の角、

真っ赤な炎でできた鬚^{たてがみ}、

尖った大きな牙、

銀色に輝く肌、

太く筋肉質な4本の脚、

全身を覆う大きな鎧…

そして輝く金色の眼光は鋭くこちらを捉えている。

『さあ！いよいよ対決が始まります！

このベヘモット、レント選手は倒せるのか！？
制限時間無制限！

レディイイイイイイイイイイイ…

ゴオオオオオオオオオオ！

「サモン 召喚！ “サーヴァント 従者” ！」

召喚したのは獣人ヴェスティアの状態のウィータ。

剣と盾を携え、鎧姿に赤く大きな翼が映える。
髪も薄っすら赤に染まったのか桜色に。

「いきますよ、レント様。

私が前衛で戦ってる間に詠唱を！」

「うん！気を付けてね！」

『おっと！レント選手使い魔を召喚した！

使い魔、武器を持っている！どうやら前衛のようです！』

「影を喰らい、身を喰らい…」

どっしりと構えたベヘモットの脚をウィータが斬りつける！

「黒き深淵、波打ち揺れる…」

しかし傷は浅く、ビクともしない！

「くっ、手ごわい…」

引き付けることすらできないっ…！

…はっ！レント様！」

ベヘモットはレントに向かって突進してきた！

「喰らいつけ！凍てつく闇の従者！」

しかしレントは詠唱に集中していて気付いていない！

「エダークス・プロフォンダム人喰い奈落…はっ！」

「危ないッ…！！！」

ウィータはレントを抱えて空高く舞い上がった！

「ふう…危ないところでしたね、レント様…」

「んー！！んー！！」

「もう少しで詠唱終了でしたのに申し訳あり…ん…？」

レントはウィータの胸の中で青くなっていた。

「はっ！も、申し訳ありません！
そ、そういうつもりではっ！（汗）」

「ぷはっ…だ、大丈夫大丈夫…
お花畑が見えたよ…（幸せな感触の中でね…）」

「しっ、失礼いたしました…
とりあえずこのまま詠唱を！
空からならやつも攻撃できないでしょう！」

「うん！そうだね！」

アールデンス・ヴァルナー
大海の怒り！」

闘技場の中心に向かって壁から円形の大波が襲う！

「やった…！？」

「なっ…これは…」

べへモットはびくともしていなかった…

たてがみ
鬚はじりじりと燃え盛っている…

「な、なんで！何で効いてないの!？」

「おそらく魔法障壁マギア・エスクードです…

それもすごく強力だった…魔物が使えるものじゃない…」

「じゃあ相当すごい魔物…ってこと…?」

「いえ…魔物が使えるとしたら竜種か何かぐらいでしょう…

しかしあれがその類の魔物だとは思えません…

おそらくあの鎧に強力な無効化呪文アンチスベルが付加されているのでしょう

…」

「ってことは…あの鎧を壊さないと…倒せない?」

「推測の域を出ませんが…おそらく。」

物理攻撃すんなり通したので私がどうにかこうにか…ってことで
すね…」

「うーんでもあの巨体に一人では厳しいよ…

何かいい方法は…むむー…

はっ！そういえば！…！」

“もしかするとテロスの本にあったノンキャストスベル無詠唱呪文は、
ウィータに命令したりするものか何かかもしれないな。”

「おじいちゃんが言ってたノンキャストスベル無詠唱呪文！
あれ結局確認してないけど…一か八か使ってみるっていうのはど
うかな…？」

「そういえばそんなものが…いいかもしれませんね！
使われる身はとも不安ですが…（泣）
レント様です、きっと大丈夫ですよ！行きましょう！」

ゆっくりとウィータはレントを降ろした。

「よし、じゃあ準備はいい？」

「はい、いつでも。」

「命令す！突撃！」

するとウィータの姿が変わっていく！

鎧や兜は分厚く、彫刻部分が赤く光り、
剣から大きな槍に変わった！！

「…れ…ごい…です…ち…らが…いて…る…たい…す…」

「声が籠ってて聞こえにくいけどなんか大丈夫みたいだね！」

「…って…ます！」

「…ってらっしやい！」

ウィータはものすごい速さでベヘモットに向かった！

ベヘモットは鋭い牙でウィータを襲う！

重い装備にも関わらず、ベヘモットの猛攻を素早くよけると、

ベヘモットの体の下へするりと潜り込んだ！

覆う鎧に目にも留まらぬ速さで何度も突く！

しかし壊れるまでには至らない！

するとウィータは、さっと体の下から抜け大空高く舞い上がった！

それに気付いたベヘモットは2本の角の間に力を蓄え飛んでいるウィータを狙っている！

ウィータは翼を畳んで槍を構えて急降下し鎧を狙う！

ベヘモットは角の間に蓄えた火の球を急降下するウィータに放った！

…直撃だ！

直撃した瞬間大きな爆発が起きた！

ものすごい威力に観客がざわめく…！

「ウィータアアアアアアアアアアアアアアアア！」

第17話 「戦う乙女は美しいってお話。」（後書き）

僕が思うにレント君むっつりですね。

まあ16だから仕方ないか！（、。、。、*）

ウィータさんピンチでございます…

どうなるんでしょう…？

私事ですが、インターネット止められるとか止められないとかで…

まだ詳しくわかりませんが分かり次第連絡します！

ではでは！

ちなみに籠ってて聞こえなかったウィータさんのセリフ

「これすごいです！力が湧いてくるみたいです！」

「いつてきます！」

でした。（笑）

第18話 「僕にとっては夢のようなお話。」

ウィータは瓦礫の中に埋もれてしまった。

あの大きさの金属の塊だ。僕一人では動かすことさえできない。

でもウィータがいないと戦えない…

…いやもし助けられたとしてもあの体で戦わせるのはこっちも辛い…

せつかく道を切り開いてくれたんだ。

やろう、ひとりで。

なんとか時間を持たせる方法はないか…

動きを止める方法は…

…！

そういえば今なら沈黙で唱えた魔法も効くはず！

シユテイル・キャスト

よし…！

デス・ファレナ
「死の鯨！」

べへモットの体を水の球が包む！
しかしこの程度の魔法は効いていない！

グラキエス・フォルメント
「零下の満月！」

その水の球を凍らせた！

べへモットはジタバタしているようだが動けない！

時間を稼げた！いける！

「影を喰らい、身を喰らい……」

……ミシッ

「黒き深淵、波打ち揺れる……」

……バキッ……ミシミシッ……

「喰らいつけ！凍てつく闇の従者！」

ベキツ…バシヤア…

「エタークス・プロフォンダム
人喰い奈落！」

その時！火の球がレントを襲う！

とっさにマギア・エスクード魔法障壁を張るもの
ものすごい威力に壁まで一気に飛ばされ叩きつけられてしまった。

「ぐっ…！！！」

凍った水の球は解け、傷一つないベヘモットの姿が…

顔と障壁を張った左手にやけどを負った。

動かすのも辛いぐらいだ。

顔は見えないからどうなっているのかわからないけど、

左手に関しては爛れて真っ赤になっている。

幸い右手とロープが掛かっていた体から脚にかけては無事だ。

その脚でなんとか立ち上がり、言った。

「イニシオ
発動……」

すると二つの大きな穴が開いた！

さつき唱えた魔法は遅滞呪文モーラスベルだったのだ！！

言わば罫のような呪文で、好きなタイミングで発動できる。

一回目の詠唱も失敗したのではなく、仕掛けていたのだ！

その魔法でベヘモットの前と後の2本ずつ脚がその穴に落ちた！

ベヘモットの動きを封じた！！

「流るる雷雲、うんえい雲翳、らいてい雷霆……」

僕はこれで終わらせる。

「煌く紫電、逆巻く疾雷しつらい、咽ぶ雷電……」

あの時使ったものより強力な古の魔法で。

今までの僕を。

「帝王の審判！死、あるのみ！全てを裁く帝王の大鎌！」

そして始めるんだ、僕の旅を！僕の人生を！

トレーノ・エンペラード・ガードニア
「雷撃の帝王の大鎌！」

その鎌は雲をも割くかのような大きなもの。

レントの手のひらから伸びる大鎌は掴んでいるのではなく、手と一体になっている。

その一振りで地面ごと突き刺し、

大きく引き抜いた時には地面の大きな傷跡が残り、

べへモットは真っ二つになっていた。

『きつ、決まったああああああああ！！！』

長き死闘の末勝ったのは！

若干16歳の天才魔法使いだああああああああ！！！』

“うおおおおおおお！……！！”

ふわっと脚がふらつく…

そして大きな歓声の中、

遠のいていく意識の中、

こっそりガッツポーズしていた僕がいた。

第18話 「僕にとっては夢のようなお話。」（後書き）

少し短め…でしょうか？

闘技場編そろそろ終了ですね…

やっと通常運営に入れそう？

いやいやどうだろう…

でも、しばらく戦闘シーンは少なくなりそうですね。

僕が疲れました。（笑）

文字で伝えるって、難しい。

そう思い知らされた闘技場編でした。

お話も次のステージへ。

どうぞ期待でございます（*、*、*）

ではまた次回！

第19話 「晴れない雨はないってお話」

目が覚めると闘技場の医務室にいた。

時間はそれほど経っていないようだ。

となりのベッドには傷を負ったウィータが寝ている。

僕の左手には包帯がグルグルに巻いてある。

「目が覚めたんですね。」

「調子はいかがですか？歩けますか？」

「ナースさんだ。」

「あつ、全然大丈夫です。」

「脚はケガはしてないので歩けます。」

「ならよかった、そのままこちらへ来ていただけますか？」

「あつ、その前にウィータは大丈夫そうですか…？」

「傷が深くて、出血もひどい。」

「長くは持たないかもしれませんが…」

「そ、そんな…」

ふとウィータの方へ振り向くと…

その体は光を放ちながら消えつつあった…！

「…！ウィータ！どうしたの…？

ナスさん！どうにかしてください…！」

「そんなこと言われなくても…！」

そうこうしているうちにウィータは完全に消えてしまった…

しかしそこには一つの赤い卵が残っていた。

「たまご…？もしかして…！」

ピキッ…

パリパリッ…

「とおりやああああ〜！」

小さな女の子がスーパーマンのようなポーズで
勢いよく飛び出した！そしてレントの顎にクリンヒット！

「がふっ！」

「しゅみましえん！わじゃとじゃないんでしゅ！
勢い余って飛び出しちゃったでしゅ…！」

そこには手のひらサイズの銀髪の女の子がちょこんと立っていた。

「でっ…でしゅ？（汗）」

君は…ウィータ…だよね…？」

「そっでしゅ！（キリッ）」

たくさん食べれば元に戻ると思いましたので
しばしお待ちを〜でしゅ〜。」

「うっ、うん…（何これかわいい…）」

ケガとかは大丈夫なの？」

「はい、大丈夫でしゅ！」

しえーかく（正確）には大丈夫じゃなかったんでしゅが死ぬ間際に、

きじゅちゅいた（傷ついた）元の体の魂を卵に籠めて、
生き返ることができるんでしゅ！不死鳥ふえにっくしゅでしゅ！」

「そ、そうなんだ…」

とりあえず無事でよかったよ…安心した…」

「私もレントしゃまが無事でよかったでしゅ！」

レントしゃま…だと…！？

何この小動物…飼いたい…

「あの…とりあえずこちらへ来ていただけませんか（汗）」

「はっ、はい！でもどこへ？」

「表彰式ですよ！あなたの！」

小さなウィータは肩にぴよんと飛び乗り、

僕は案内してくれるナースさんと一緒に門まで行った。

「さあ、みなさんお待ちかねですよ！」

門を開け放つとそこには、

たくさんの観客の人達と、

真ん中には大きなステージ、

その上には王様がいた。

『戻ってきたああああ！』

あの死闘を繰り広げたヒーローのおかえりだああああ！』

“うおおおおおおおおおお！！！！”

僕はステージまで続く赤いじゅうたんの上を歩く。

王様はそこでどっしりと待っていてくれている。

ついた。

いやいやでも僕16だよ！

ええええええ！どうしよどうしよ！困ったぞ！

『何言ってるのよパパ！』

レントくん困ってるじゃない！』

闘技場に来ていたポルフィさんが実況席を乗っ取ったようだ…

「はっはっは！すまんすまん！

ジョークさ！これは二人の問題だからな！

もしもらってくれるなら私は大歓迎だからな！」

『パパったら！もう…／／／』

「はっはっはー！…えー、ごほん！で副賞だが、これだ。

名馬エントレイ！

希望すれば馬車もプレゼント！

？どうだ？いいものだろう？

君のために急遽用意したんだ。？」

王様は僕に囁くと、パチツとウィンクした。

「わあ！ありがとうございます！」

「これで表彰式を終了する！

皆！勇敢なレントに盛大な拍手を！

？レント君、明日、王宮を訪ねてくれ。？」

“うおおおおおおおお！！”

闘技場は拍手と歓声の中幕を閉じた。

僕は王様の言葉を気にしつつも門へ向かった。

「レントくん！

おっめでとおおおっ！」

門から中に入るとそこには

ピョンピョン跳ねるポルフィさんとラークの姿があった。

待っていてくれたんだ！

「あつ、ありがとうございます！」

「いやあまさかのろまのお前に負けるとはなあ…

一体どんなことしたらあんなに属性使えるのか、

俺には理解できねえよ（笑）」

「あっそれはねー！
レントくんの属性が絶対記憶だからだよー！
すっごいよねーっ！びっくりだよねーっ！」

「なっ、なんだって！

英雄の属性かよ…

そりゃ勝てないわけだわ（泣）

でも姉貴、結構な試合だっただろー？

姉貴の記録超えたんだからさっ！」

「うん！よくがんばったね！

偉い偉い！よしよーし！（ナデナデ）

「へへっ／＼／」

シスコン…なのかな…

「それにしてもポルフィさんの記録を

超えられるとは思ってもみなかったよ…

なんてっ たって竜種相手にした人だから…

あっそういえばなんでポルフィさんってAランクなんですか？

竜種倒した時点でSランクハンターのはずじゃ…？」

この世界の魔物にはランクがついている。

Cランク、一般人が倒せるレベルの魔物。
スライムとかその手の弱い魔物だね。

Bランク、大体のハンターが倒すことができるレベルの魔物。
この前の巨人族ジャイアントとかがそれだね。

Aランク、並のハンターでは倒せない強力な魔物。
今回のベヘモットとかつよい魔物。

Sランク、竜種、その他特別強い魔物など、
出会ったら生きて帰れないレベルの魔物。

に分かれてるんだ。

ギルドでそれぞれのランクの魔物を討伐するような
クエスト依頼をこなした時点で自動的にランクがつけられる。

「うーん…まあ私素手で戦ったからなあ…
だから結構ゆっくりな記録になったのかも知れないね…」

…素手？

「あとAランクで止まってるのは、
Sランクだと闘技場に出られないからなんだ。
竜種だって、武者修行中にたまたま遭遇して倒しただけで
クエストとして受けたわけじゃないからランクは上がらない…
けど竜種倒したやつがへらへら闘技場に出たら
ブーイング受けるかなあって…だから素手で出てるのよね…
魔法を使って拳に冷気を纏わせてね…って…
ん…？なんか…変なこと言ったかなー？（汗）」

…化け物…ですか？

「俺達がんばったのっていったい…」

「だよね…」

「「はあ…」「」

「とりま俺先に帰るわ…じゃあな…」

ラークはとぼとぼ歩き出した。

と思っただけで戻ってきた。

「姉貴には手エ出すなよ？」

そういつてまたとぼとぼ帰って行った。

シスコンだった。

「レントくん…さっきはパパが変なことと言ってごめんね？」

「いつ、いえ…大丈夫です…／／／」

「まあ気にしないで！私はいんだけどレントくん困るよね！
ホント変なパパでごめんね！じゃあ私も帰るね！ばいばい！」

「はっはい！また！」

あれ…？

いい…の？

…

帰ろつと…／／／

「よくやったのぉ！レント！（おかげでガツポガツポじゃ！）」

闘技場を出るとおじいちゃんと母さんがいた。

「ありがとう！おじいちゃんー！」

「レント…あなた…傷だらけじゃない…」

小さい傷跡で済んだもののレントの顔にはやけどのあとが。
アル力はそれを優しく撫でる。

「ごめん…でも、勝ったよ。」

僕、初めてがんばったんだよ。」

「そうね…偉いわ、レント…」

勝ったということとは…どうしても…

どうしても行くのね…？」

「うん、行きたい。」

「約束だものね。」

でもこれだけは守って。

あなたはその力を間違った方向に使ってはダメよ。

その力は誰かを護る為にあるのであって、決して人を殺めるだけのものではないの。

ちゃんと考えて使いなさい。お母さんとの約束よ。」

「うん、わかった。

約束する。」

「そうとなったら今日の晩ご飯は

とびつきりおいしいのを作らないとね!」

母さんはあの時と同じ涙に目を潤ませながら、

涙の粒を零さぬように天を仰いだ。

そこにはあの時のような黒い雲ではなく、

満天の星空が僕等を照らしていた。

第19話 「晴れない雨はないってお話。」（後書き）

アルカさん、いいお母さんです。

なんだかんだで丸く収まりました。良かったです。

ちびウィータ出てきましたね。萌えました。

あと王様完全にレント君のこと気に入ってますよねW

完全にポルフィとくつつける気ですねこれWWW

お気に入り登録、感想、評価、誠にありがとうございます！

おかげさまでここまで続けられています！

本当に感謝しています！ありがとうございます！ありがとうございます！

これからもレント君の活躍を温かく見守ってください！

では！また次回！

第20話 「ほんのわずかなきほんのお話。」 (前書き)

第20話 「ほんのわずかなきぼつのお話。」

僕は軟らかい日差しと鳥の囀りの中で目を覚ます。

昨日はそのままウィータも含めて3人で食事をして、
わいわい話し込んだあと、ぐっすり寝てしまった。

「レント様、朝でございます…」

あら、もう起きていらしたんですね。

おはようございます。」

「おはよう、元に戻ったんだ？」

ちよつと残念だな…

「はい、昨日はお見苦しい姿を…（汗）」

食べに食べまくったちびウィータは

最終的にボールみたいになったからね…（笑）

「ううん、かわいかったよ。

なんか癒された（笑）」

「うう…／＼／

それは褒めていただいでるのでしょうか（泣）」

「うん！（多分ね！）」

二人で下へ降りると母さんがご飯を作っていた。

あの朝もこうやって後ろ姿を見たっけ。

…「うう」とこまで思い出すのって少し辛いような。

ううん、あんまり考えるのはよそう。

「おはよう。」

「おはよう、レント！」

今日はチーズトーストと牛乳です！

ウィータちゃんの方はたくさんあるからね！」

ウィータの前には大量のチーズトースト…

そんなに食べたら飽きるよー…

「あ、ありがとうございます。」

（たくさん食べるのは小さいときだけなのに…泣）

新しい家族が増えたような朝に新鮮さを覚えた。

なんだか幸せな気分だ。

「しかしびつくりねえ…」

ウィータちゃんが一晩でこんなに大きくなるなんて…」

「きつと育ち盛りなんだよ。(胸もね。)」

「でも小さいころが短いのは寂しいわね…」

可愛い服たくさん着せたりしたいし…」

「可愛い服…ですか…」

「…あ、そういえばウィータってずっと同じ服だよね。ちゃんと洗ったりしてるのかな？」

白いドレスのような服をずーっと着ている。でも汚れているようすはない。

「もちろんです！魔法で綺麗にしています！」

「でもウィータちゃんかわいいのに勿体無いわよ！レントにもらった賞金でお洋服買ってらっしゃい？」

あつ、賞金は母さんに全部あげました。(ドヤア

「そんな！私は使い魔の身でございます！」

私のような分際でそのような贅沢はできません！」

「堅い事言わないでさ？」

ウィータには助けてもらったんだ。

お礼ぐらいしなきゃ！

服だけじゃなくて好きなもの買ってあげるよ！
いいよね？」

「ええ！もちろん！」

「じゃあ今日は二人でデートしてらっしゃい！」

「デートって…／＼／」

「私が…レント様と…／＼／」

「さあさあ行ってらっしゃいー！」

「なんだかんだでお金持たされて…」

「家を追い出されましたーっ」と…

「えっと…どうしようか？…／＼／」

「私はレント様についていきます…／＼／」

「この空気…」

「おじいちゃん（泣）」

「あっ！じゃあとりあえず商店街行くっか！」

「はい！」

…と来ては見たものの…

洋服とかよくわからないし…

とりあえずお店に入ってみればいいのかなあ…

最初に目に付いたきれいなお店に入ってみた。

「いらっしゃいませー！」

「あー…この娘に似合う服選んでほしいんですけど…」

「はい、ではこちらの…」

ウィータと店員さんはなんだか話し合っ決めてるみたい。

僕は座るところがあったのでぼーっとしていた。

…

「お待たせいたしました〜！」

…！

花柄のノースリーブワンピースにヒールのサンダル、

つばの広いクロッシェにきれいなブレスレットという感じ。

「ど、どうでしょうか…?」

「似合ってるよ…とっても…／＼／＼（か、かわいい…）」

「ありがとうございます…／＼／」

「…いこうか！ね！」

「はっ、はい！」

とりあえず僕は店を出た。

外は秋の始まりを迎えつつあるが
まだ暖かい日差しに包まれている。
過ごしやすい気候、だね。

秋の街路樹と美少女…

絵にでもしたら素晴らしいと思うんだこれ。

「そっいえば王様に呼ばれてたんだっけ。

「うーん…ちょっと行ってみてもいいかな？」

「はい、お供いたします！」

王宮へ着くと衛兵は僕を見るなり道を開けてくれた。

「やっぱり広いなあ…」

「レント様はここへ来られたことがあるのですか？」

「うん、一回だけね。」

…ってよく考えてみるとすごいことだね。

王様に何度も会ってるって只事じゃないし（汗）」

あれこれ話しながら長い赤絨毯を歩くと、
その先にはどっしりと構えた王様が待っていた。

「やあ、レント君。」

先日はベヘモット討伐おめでとう！

素晴らしい戦いだっただ！感動したぞ！」

「あ、ありがとうございます！」

「立派な姿に天国のテロスも喜んでいよう。」

では、さっそく本題に入ってもよろしいかな？」

「はっ、はい。」

「先日、君の覚醒の儀式を行った神父が殺害された。」

「なっ、何故!？」

「まあ聞け。」

神父の名前はアフティ、死体が発見されたのは奴の自宅、そして家には荒らされた形跡があった。主に数十年書き溜めた日記が散乱していた。それには組織との取引や、賄賂、密輸など、結構な数の悪事について書かれていた。おかげでいろんなことがわかったよ。

しかし問題はここからだ。」

「とうとう?。」

「その日記は全て押収したんだが、とある年の日記の数ページが破って持ち去られていた。その持ち去られた数ページ、いつのものだかわかるか?。」

「いえ…わからないです…。」

「8年前の君の誕生日のものだ。」

「…えっ？」

「レント君、君の第1属性は『のろま』、だったね？」

「はっ、はい…」

「おそらくだが、それは嘘だ。」

「!？」

「私が今まで生きてきて、

何人か『のろま』を持った者を見てきた。

しかし君のようにあんなに素早く上級魔法を
唱えられるものなど一人もいなかった。

だから君はおそらく第1属性を持っている。」

「でも全部の基礎属性の魔法を覚えましたが、
特別使いやすかったなんてものはありませんでした！
だから多分基礎属性は持っています！」

「だろうな。私もそう思う。」

私も持っていないだろうと思っていた。

普通に持っているなら隠す必要などないからな。」

「じゃあどういふことですか!」

「何かその属性であつては

『困る』

ものだったのではないか?

ならば隠したのも辻褄が合うだろう?

これは推測だが、

君がこの属性であつては『困る』者がほかにいて、

その者が君にこの属性を知られてしまふのを恐れて

アフティを口封じに殺し、日記を破つて持ち去り逃げた。

ということではないだろうか。」

「そ、そんな…」

「じゃあ僕の属性は…」

「私の知る限りそれを知る術はないな…」

しかしこれで旅の目的が増えた。

この世界は広い。旅をしていれば
それを知る術が見つかるかも知れん。
私も全てを知り尽くしているわけではない。
可能性は十分にあるう。」

この世界で自分の属性がわからないってことは
性別がわからないのと同じようなこと。

この世界の理を大きく外れていることなんだ。

ホント、なんで僕ばかりこんな目に…

だれか…

「少しでも…少しでも希望があるなら…」

だれか僕の…

「僕は旅に出ます。」

僕の属性を教えて…

第20話 「ほんのわずかなきぼつのお話。」 (後書き)

遅れて申し訳ございません！

お待たせ(？)いたしました！

友達の家にて更新させてもらいました。

サブタイトルの意味がここで明らかになりましたね。

今回で1章終了です。

なのでキリのいいところまで更新しておきたくて…

一応5月末から6月の始くらいには再開できそうです！

では！2章をお楽しみに！

第21話 「いつかのアリスのお話。」 (前書き)

「これはレントが闘技場に挑む前のお話…」

第21話 「いつかのアリスのお話。」

「どうしてダメなの！」

「ダメと言ったらダメだ。」

「今回は人数が少ないから、
当日にエントリーしても参加できるんだよ!？」

「それくらい知っている。
何年生きてると思ってるんだ。38年だぞ。」

「それじゃあ…巨人族ジャイアントなんかに負けたから…？」

「そうだな…それもあるかもしれんな。
しかしそれ以上にまだ修行不足だ。」

「まだBランクなんだぞ？
それで闘技場に出るなんて…」

「今回は火属性の大会、同じ火属性のお前では厳しすぎる。
氷属性の大会が冬にある。それに向けて修行すればいいじゃないか。」

「う、うん…」

「お前はなかなかよくやっているとは思う。だが！まだまだだということ、しかと肝に銘じておくように。以上、下がってよし。」

「失礼しましたーっと…」

アリスはとぼとぼと騎士長室を出た。

騎士長レーヴェ。髭の似合うダンディなおじ様。

魔法は一向にできないものの、

剣術は大陸一と言ってもいいほどの腕。

その戦績は数知れず、Sランクのハンター、竜種討伐総数7体、そして闘技場に殿堂入りしている一人でもある。

今はギルドの騎士学部のトップであり、

剣術科、槍術科、魔法剣士科の剣術講師をしている。

ちなみにアリスのお父さんです。

はあ…

厳しいなあ…

私だって強くなってるのに…

パパのバカー…

「ったく！」

ラークが大会に出てみるよなんて言うからよ！

その気になった私がバカみたいじゃない！あーもうっ！」

…

「確かにそうだな！」

まだBランクなんだし（笑）」

そこには金髪のあの男が。

「ラーク！聞いてたの！？」

「聞いてたも何も独り言とは思えないくらいでかい声だったぞ？いつものことだけど。」

「なっ！何よ！悪かったわね！Bランクで！ラークはいいわよね…」

最近の活躍、ギルドで噂になってるわよ？」

「だろ？そのおかげで女の子にモッテモテさ！（キリッ）」

「モッテモテは知らないわよ！」

にしても村を荒らしてたグリフォン倒したのって
あんたなんでしょ？すごいじゃない！いくら入ったのよ？」

「んー、まだもらってないけど2万リコくらい？
鳥獣だから雷がよく効いたただけだぞ？（笑）
大したことじゃないさ。今度飯奢ってやるよ。」

「おっ、サンキュー！（ラッキー）
で、今日闘技場出るんでしょ？
あれよ、応援行ってあげるわよ？」

「マジか！
なんか嬉しいなそれ！
今から闘技場行くとこなんだ。
お前も一緒に来るか？」

「仕方ないわね！ついて行ってあげるわっ！」

よく考えたらラークの戦うとこ見たことないわね…
いい機会だし勉強させてもらおうと。

なんだか癩だけどね。(真顔)

そろそろ闘技場ね、
ライクのほかの挑戦者誰なのかしら…

あっ、貼り紙はっけーん…

ん…？レント？

はっ！まさかね！
あんなのろまが来てるなんてないない！

どうせ同じ名前の人よ！

…まさかね…？

アリスはもやもやししながら控室までついて行った。

「うっし、じゃあ行ってくるわ。

しっかり見ててくれよ！

なんか秘密の合図でも送るうか？ウィンクとか投げキッスとか。」

「いいわよ気持ち悪い！

まあけがはしないようにね！

あんたならいけるわよ！」

「おう！じゃあ行ってくる！」

アリスは、拳を掲げたシルエツトに

頼もしさを感じながら観客席へと移った。

『みなさんおゝまたせしましたああああ！

今月の闘技は火属性の魔物で統一されている！

まっさつに炎のパアアアアッラダイス！』

実況の奴テンション高いわね…

『さあ！今日最初の挑戦者！女たらしの王子様！

ラアアアアアアアアアック！』

ぶっ…ぴったりじゃない（笑）

『えー今回は秋季最後の闘技となります。

秋季の最速タイムは絶対零度コンハラル・ステッラの流星でおなじみの

ポルファイ選手の3分21秒です、さあラーク選手、この記録を超

えられるか!』

さあ、お手並み拝見ってとこね。

そして、

『決まったあああああああ!』

あの煉獄ケルベロスの番犬を!

恐ろしいスピードで倒してしまったあああああ!!

さあ注目のタイムはどうなったんだ?!?!?!?』

すごい!すごいよ!

あいつホントに同い年かしら!

終わったら会いに行つてやらないと!

『さあ!タイムの発表です!

ラーク選手のタイムは…

3分ジャストッ！！！！

ポルフィ選手の記録を21秒も上回る大記録だああああ！！』

嘘っ！新記録！？

すごい！さすがAランクね…

16歳のAランクなんて指折り数えるほどだもの…

これぐらいできるのよね…

私も…がんばらなくちゃ…！！

さああいつに会いに行つてやろう！

階段を駆け下り控室の方へ走つた。

そこには息も切らさず始まつた時と変わらないラークの姿が。

「ラーク！すごいじゃない！

何よ！かっただけじゃないのね！

なかなかかっこよかつたわよ！」

「おっ！サンキュー！

でもいいのか？そろそろあいつの番だぞ？」

「あいつって？」

「おいおい知らないのか？」

レントが闘技場に出てるんだぞ？

あの のろま がだぞ？」

「同じ名前の別人じゃないの？」

「バカ言ってるじゃねーよ（笑）

エントリーの時あいつんとこのじじいが

受付で手続きしてるの見たから間違いないよ。」

「嘘…」

私が出るの止められたのに

あんなやつが勝てるわけないじゃん…

あのレントが…のろまが…」

「何でもアルカさんが言い出したらしいぜ。

まあ見ててやるーぜ。俺も行くからよ。」

ラークに連れられ観客席へ戻る。

観客席へ戻るとラークの顔を見た観客が寄ってきた。

「プライベートだ。」

とアイドルか何かみたいに断ると二人で席へ着く。

「そろそろだな。」

『本日2人目の挑戦者は未知数の実力！』

実績もクラスも全く情報がないが、ただ一つ入った情報は基礎属性を持っていないという特異な体質だということ！

さあそのハンデを背負ってどう戦うのか！むしろ戦えるのか！？

みなでお手並み拝見と行こうじゃないかッ！

新進気鋭のダークホース！レントオオオオオオオオオオ！』

「おっ、出てきたぞ！

こけたりしねーだろーな？（笑）」

「なんでレントが…」

絶対怪我するに決まってるのに…

なんで…基礎属性も持ってない上に武器も何も使えないのに…

ここ何日かで何かあったって言うの…？

まさか…誕生日…

『おっとレント選手、ペコペコお辞儀をしている！』

なんて礼儀正しいんだ！』

「はっはっは！

見てみるよアリス！

あいつお辞儀してるぞ（笑）こりゃ傑作だな！
ってなんでそんなにテンション低いんだよ…」

「そんなこと…ないわよ…」

「あるよ！

まあいいけどよー（汗）

そろそろ始まるみたいだぜ！？」

『さあ！準備はいいか！

始めるぞ！魔物は前回と同じ地獄の獵犬3体！

ヘルハウンド

ではいくぞ！レディイイイイイイイイイ…

ゴオオオオオオオオオオオ！』

あいつが…私より…

私より先に闘技場に出るなんて…

うづん、きつとすぐやられちゃう。

戦いを甘く見てるのよ。

ちよっと痛い目みたほうがいい。

『さあ始めました第1ラウンド！

どんな試合を見せてくれるのでしょ…

なっ…終わっているうううううううう！?!?!?!?!?
何が起こったんだあああああああ！?!?!?!?!?』

えっ…何？

もう終わったの？

大丈夫かしら!?

っ…勝って…る？

第21話 「いつかのアリスのお話。」（後書き）

やっと復活！そして第2章始まりました。

初日は2本立てです（ただ1話に収まらなかっただけ…）

これからは通常通り毎日午後9時に自動で更新いたします。
これを機に新たな気持ちでがんばって行きます！

第22話 「負けると悔しいってお話。」

そしてレントは

後の第2、第3ラウンドも

一瞬で片づけてしまった。

『終わった…終わったあ ああああああ！』

Aランクのモンスターケルベロス煉獄の番犬さえも秒殺！

さらにレント選手4属性も操れるという事実！

これは祭祀長の3属性よりも多い！

ということはこの街で一番の天才だあああ！』

なんで！なんでなの！

あいつが天才！？

むしろ逆よ！のろま！のろまなのよ！

なんで…なんでなのよ…

『さあ注目のタイムの発表だあ！』

レント選手のタイムは…

1分48秒！

すごい！すごいすぎる！

ラーク選手の記録を大幅に塗り替えるあり得ない記録だああああ
あ！

そして！見事ベヘモットへの挑戦権を得たのは、

このレント選手だああああああああ！』

…

嘘よ…

私よりあいつが強いなんて…

今まで頑張ってきたのにあんなやつに負けたの…？

「マジかよ…」

こりゃ魂消たぜ…

俺の修行も結構なはずだったんだがなあ…

まっ、完敗…だなこりゃ…

にしても4属性って化け物かよ…（汗）「

』さあ！レント選手には、このままAランク、

いや、実力はSランク相当であろう！

あの双角魔獣ベヘモット戦っていただけです！』

「ねえ…レントに何があったの…？」

「わかんねえよ…俺が聞きたいくらいだ。

とりあえずここ何日かで何かあったんだろーな。

…お、始まるぞ、ついにベヘモットだ。」

』出でよ！燃え盛る魔獣の王よ！

双角魔獣ベヘモットの登場だあああああ！』

「なによ！あのデカさ！

あんなのに勝てるの！？」

無理よ！絶対無理！！！！」

「うわ…冗談きついぞ…
俺倒せる気しないわこれ…
気張れよ…レント…！」

『さあ！いよいよ対決が始まります！
このベヘモット、レント選手は倒せるのか！？
制限時間無制限！

レディイイイイイイイイイイ…

ゴオオオオオオオオオオ！』

そして長き死闘の末、レントは勝利を収めた。

『きつ、決まったああああああ！！！
長き死闘の末勝ったのは！
若干16歳の天才魔法使いだああああああ！！！！』

“うおおおおおおおおお！”

大きな歓声の中アリスの心境は複雑だった。

- - - - -

- - - - -

- - - - -

- - -

-

“うっ…ひっぐ…”

“うえーい！のろまー！のろまー！”

“やめなさいよ！あんた達！張り倒すわよ！”

“ げ、アリスだ！逃げるー！”

“ もう…まったく…私がいないとダメダメなんだから。”

-

-
-

-
-
-

-
-
-
-

-
-
-
-
-

「おい…」

…

「おい…ア…ス！」

…

「おい！アリス！」

「…！」

「ごめん…ぼーっとしてた…」

「レントが勝ったんだぞ！？
もつと喜べって！どうしたんだよ！
てか今日のお前なんか変だぞ！？」

「そんなこと…！
そんなこと…ない！
っ…！！…！！！」

「おい待てよ…！！！」

アリスはその場を飛び出し、

闘技場の外へ走った。

走っている途中に何度かぶつかった。

でも止まれなかった。

それでもしないとやっていられなかった。

でも外に出て見えた景色。

夕焼け色に染まった街。

その景色に思わず立ち止まってしまった。

そして思った。

負けてしまった。

なんであんなやつに？

それにあの雷属性の魔法…

巨人族ジャイアントと戦って倒れてる時に見た気がする…

レントに護られたって言うの？

私が強くなって護るって決めたのに…

ママみたいに魔物に襲われて死ぬ人は見たくない…

だからこれまでがんばってきたのに…

護られててほしいのよ…

まだまだ強くならなきゃ…

こんなところについても強くなれない…

強く…強く…

そうよ…

うん…決めた。

街を…出よう。

第22話 「負けると悔しいってお話」 (後書き)

失意のアリス。アリスさん旅に出ます。

えー今回二本立てでしたがどちらもサイドストーリー。

さっさと本編やれよ！と思われたかもしれませんが

次回はレント君の方に戻りますのでご安心を。

あと評価ポイント100超えましたね！

本当にありがとうございます！

こっそりテンションあがってます(照)

これからもがんばります！

もしよければ応援よろしくお願いします!!

ではまた次回(*´、*´)

第23話 「朝霧があると何かが起きるよなってお話。」

僕はレント。

16歳になって5日目。

この短い間は恐ろしい密度で。

戦いも知らない自分が気付けば闘技場の覇者になっていた。

その時に、ものすごい攻撃を受けたのにまだ生きてる。

きっとローブのおかげだね。

でもやっぱり左手はまだかなり痛む、

顔のやけども少し跡が残ってしまった。

少しショックかな…

でもそれよりショックなのは昨日王様と話した内容。

僕の第一属性がわからないこと。

自分の性別がわからないようなもの。

これで不安にならないほうがおかしい。

でもこれで旅の目的がまた増えた。

1つ目、修行のため、世界を旅する。

2つ目、盗賊団を倒す。

そして3つ目、僕の第1属性を知る術を探す。

この3つだ。

で、今僕はどっしているかといひしよ、

馬車に揺られている。

もう街を発ったんだ。

母さんもいろいろあつたけど笑顔で見送ってくれて、
本当に感謝しないといけないね。ありがとう、母さん。
旅の前に王様がたつぷりと必要な食糧やらテントやら
必要そうなものは一通り入れてくれたので

当分は何不自由ない旅ができそうです。

今一緒にいるのはラーク、ポルフィさん、ウィータ。

ラークとポルフィさんは盗賊団を倒すのに協力してくれるだけで、
倒したら街に戻るみたい。さすがについてきてくれないよね…

いてくれたら心強いんだけどな…（泣）

ちなみにポルフィさんが連れてきた馬車が、
ものすごく豪華なの言うまでもない。

さすがです（汗）

「ポルフィ様、盗賊団がいるところにはいつごろ着くのでしょうか？」

「一応ここをまっすぐ行つたところで襲われたつていう
報告がたくさん出てるから、もうちょっとかな？」

「しかし元を絶たないと被害は…」

「アジトはわかってるの、

今は廃鉱になったクブルム鉱山をアジトにしてる。」

「なるほど…ではそこまで行くんですね。」

「今日はその手前まで、かな？」

一方レント側馬車

「かーっ！

なんで俺がこっちの馬車なんだよおい！

ウィーたちちゃんと話せると思って楽しみにしてたのに！

おいお前！ぱぱっとほら！

召喚サモン！とかいって呼んでくれよ！な！頼む！」

「えー…やだよー…

荷物多いからこれ以上人増えたら狭いよー…」

「お前は女の子と狭い中居られるのと

男だけでむさ苦しいのとどっちがいいんだよー！！

もちろん女の子がいたほうがいいだろう！その上ポイン！」

「狭いよりは広いほうがいいよ…

ていうか人の使い魔を変な目で見ないで…」

しょうもない会話を続けていると馬車を遮るゴブリンの集団が！

10…いや20…？結構いる。でも相手が悪い。

「あーもうっ！ウィーたちちゃんと話してるのに！

とつても邪魔だよ君達っ！成敗してくれーっ！！」

ゴブリンの前にポルフィさんが立ちはだかる。

ポルフィさんが弓を構えるとゴブリン達は一気に襲いかかる！

しかし次の瞬間！

一気に数十本の魔法の矢を放った！

そして凍ったゴブリンが道を埋め尽くした。

「ふう、いっちょあがりだね！」

「…ポルフィさん…ゴブリン多すぎて通れないです…」

「あ…じめん（照）」

ゴブリンを木端微塵に砕いて先を急ぐと、

「レントくん！こっちだよー！」

向こうの馬車からポルフィさんの声が聞こえる。

大きな道を少し逸れて森の中を進んで、

ポルフィさんの指示で馬車を止める。

「今日はここで野宿だよー！」

「ケツ痛てー！やっと着いたなー！」

そこは綺麗な泉の傍だった。

夕日の木漏れ日が泉に反射してきらきら光っていて、

泉の周りは綺麗な芝生で覆われている。

そんなきれいなここが僕の旅初めてのキャンプの場所。

「ふー！やっとなつたねー！」

「でもポルフィ様、何故こんな場所を？」

「私、関所超える前に絶対ここに来るの！」

私のお気に入りの場所です！」

二人にも見せてあげたかったの」

「すごくきれいな場所！」

ありがとうございます！ポルフィさん！」

「ど、どういたしまして！／＼／

ささ！ご飯でも食べよ食べよ！」

「なら僕が作りますよ！」

お礼に作ったその日のご飯は大好評で、

レントは料理当番を任されてしまふのだった。

そしてあっという間に過ぎ、

そして夜は更け4人は眠りについた。

テントの中で目が覚めたのはまだ肌寒い早朝で、

外に出てみればまだうっすら白く霧がかかっている。

かすかに音楽が聞こえる…

ん…

だれかいる…

泉の反対側にある大きな岩にだれかが腰かけている。

もっているのはハープのようだ。

遠いうえにフードを被っているから顔はよく見えない、

純白のローブを身に纏っている、すごく、なんとというか、

神々しさを覚えた。

そして思わず声をかける。

「あなたは…だれ？」

第23話 「朝霞があると何かが起きるよなってお話。」（後書き）

どんどんお気に入り登録増えて行って焦ってます（汗）

ありがとうございます！力になります！

今回新キャラの予感…？ですね。

今回はVS盗賊団！

楽しみにしていただければなと思います！

では！また次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9136s/>

no alignment 僕の属性を教えてください

2011年10月8日23時34分発行